

月刊
オーバーリン王国
2012年1月号

オーバーリン

序文

2012年1月も半ば、迫り来るエントリーシート達の提出期限。そんな中、僕は「やらなければならないこと」を華麗に無視し、「全くやらなくていいこと」に己の持ちうる限りのパッションを注ぎ込んでいた。そんな、自棄っぱちの僕の生命がぎゅっと詰まった「全くやらなくていいこと」。月刊オパーリン王国2012年1月号、新年最初の一冊がここに完成した。代償の分だけ、自信を持って皆さんにお届けできる内容になっていると確信している。

そういや、新年の挨拶がまだだったね。いやね、まず最初にどうしても「俺、頑張ったでしょ」と褒めてもらいたかったもんでね。あけおめ。年が明けてから早くも一カ月が経とうとしている訳であるが、皆さんはいかがお過ごしだろうか。皆さんの大切な一カ月が、この一年の滑り出しの一カ月が、順調かつ充実したものであったことを望む。そして、次の一カ月の間、忙しい日々の雑事の合間に、本誌がパラパラとめくられ、皆さんの息抜きの良き「つまみ」となってくればなあ、と切に願っている。

さて、前置きはこれくらいにして、今月号のラインナップを紹介しよう。まず第一に、新しい執筆者が加わってくれた。弦楽器イルカ氏、「連載」の欄に不定期新企画として「お前、悩んでんだろ？」を執筆していただいた。弦楽器イルカ氏について、記事執筆の経緯について少し書く。本誌ウェブ版を公開している「パプー」というサイトで、弦楽器イルカ氏は僕が小説を書き始めた当初から作品にコメントを下さっていた作家さんである。去年の終わりに思い切って執筆を依頼したところ快諾して下さり、以後かなりの時間を掛けて企画を練り上げ「お前、悩んでんだろ？ 第一回」の掲載に至った。記事を読んだ後は是非とも「パプー」に足を運び、弦楽器イルカ氏の作品を読んでみていただきたい。繊細な心情を描き出した素晴らしい作品ばかりである。

次に、東町健太氏。今回で3回目の掲載である。今回は直前に東町氏のパソコンが故障するという惨事が発生し、「あわや休載か」と天を仰いだ。が、東町氏が奮闘下さり、(おそらく)漫画喫茶で新しく記事を執筆、掲載に至った。題は「生きてても無駄」、いつにも増して鋭い筆致の作品となっている。

多良鼓氏。2回目の掲載、「今回どんな記事を書いてくれるのか」と楽しみにしていた。送られてきた記事の題は「アンパンマンとキリスト教」。果敢にも壮大なテーマに取り組んだ意欲作である。前作「没個性が産み出したトップアイドル」、アニメの次がキリスト教と幅の広さが伺える。

最後に僕(オパーリン)。今月はとにかく沢山書いた。その上何を思い誤ったか、未完であった『存在と記憶の距離感』という小説まで完成させてしまい、それを全文掲載させたために今月号は異常なボリュームとなってしまった。この小説を途中まで既読の方は、最後だけちょっちょつと読んで、他の記事を読んでいただければ幸いである。その他、色々書いたが、まあ読んでみてくれたまえ。

では、この位で始まりの挨拶はお終いにしよう。月刊オパーリン王国、新年最初の一冊、どうぞお楽しみあれ。
(2012年1月18日)

オパーリン一ヶ月（日記より）

オパーリン国王の動静。これを読めば王国全体で何が起こったのか、分かるでしょう。

・ 2011年12月21日

23歳にしてまさかの寝小便を漏らす。原因不明。甚大なるショックを受ける。

・ 2011年12月23日（天皇誕生日）

大分合同出版社説明会に参加。地元優先感を感じた、そうは言ってなかったけどね。

説明会に参加して思う事は、どこに行っても、説明される事と本当（と思われる）の事が一致しないということである。それは日本語の特性にも言える事なのだが、言葉の裏というやつである。つまり、説明されることと正反対の事を「事実」と思えば、入社後の「ミスマッチ」は解消されるのではないだろうか。

—追記—

その後、大分合同新聞の「ミニ事件簿」という県内のほのぼのニュースを掲載するコーナーのイラストが一部の2ちゃんねらーに人気があり、特に猫のイラストが人気だとかいうまとめスレが載っていた。おお、何だか繋がっているな、と感じた。（2012年2月14日）

・ 2011年12月25日

セクロスさせてくれる女もいないので、友人と牛角に行った。何故か父子家庭とおぼしき客が多かった。

2011年12月30日

オパーリン作品集1『アダバナ』初版刊行。歓喜の余りに電話で友人を呼びつけ、出来たての冊子を押し付ける。友人「そんな事の為に呼びつけたのかよ」とは言わなかったが、困惑顔。

・ 2011年12月31日

家族で祖母の家に帰る。松坂牛のすき焼きを食らう。美味。

・ 2012年1月1日

昼過ぎに東町健太氏に電話で招集され、明治神宮に初詣。東町の計らいで、3年前に岡惚れしフラれた女性とも再開。相変わらず美しかった。その子は用事があり速攻でバイバイ。その後は、いつもの如く綾瀬駅前の「扇屋」で東町氏と飲んだくれる。

・ 2012年1月3日

祖母の家に新年の挨拶へ。一族が揃う。名古屋コーチンのから揚げを食らい、皆で坊主めぐりに興じる。毎年恒例の行事をこなし、満足して帰宅。

・ 2012年1月6日

小学校時代の同級生達と飲み会。懐かしかった。もう一度小学生に戻って、超ド級の悪戯、反抗をかましたい。

—追記—

今の僕の脳味噌のまま小学生に戻ったならば、ウザかった教師たちも楽々論破できるんだろうな。でも、そんな餓鬼がいたら先生はたまったもんじゃないだろうな。

・ 2012年1月8日

佐々木食品工業説明会に参加。

・ 2012年1月11日

文芸春秋「語る会」に参加。『月刊オパーリン王国2011年12月号パブ版』刊行

・ 2012年1月12日

レースフォーラム（合同説明会）に参加。退屈極まりなく、運営側が途中退場を禁じた事への反発心もあって、途中退場。そう感じたのは僕だけではなかったらしく、他にもバラバラと学生が帰宅していた。運営側は焦ったのか「帰らないでくださいーい。どうしても帰る人は一言名前を告げてからにしてくださいーい。」と声を張り上げていた。が、みんなガン無視で帰宅。頼もしきかな「ゆとり世代」。

・ 2012年1月14日

講談社セミナー参加。週刊誌の企画書の作成体験みたいなのをして、僕は「内柴レイプ事件真相を本人が激白！」という企画を提出、公表では社員の方が「即採用」してくれた。この職場で働きたい、と強く思った。感想としては「現代社会においては、選ばれし数少ない者のみが、粛清、没個性化される事を免れるのだなあ」と思った。

・ 2012年1月18日

新潮社説明会、マス読出版志望者会合参加。これについては、次月号（2月号）で詳細を記事にしようかな、と思っている。

「カフェで過ごす時間」 オパーリン

たまには「エッセイっぽいエッセイを」と思って。いやね、自分で書いておきながら、自分の書いている文章を見返すと些か「エッセイと言うにはむさ苦し過ぎる」代物ばかりだなあ、と思ひましてね。もう少し徒然と、オサレっぽいものを書いたりしましょうか、と思ったわけですよ。こっから本文ね。

最近、出歩く機会が増えて、その空き時間にカフェへ行く事が多くなった。都会の喧噪の中で、静寂な、ゆったりとした一時を提供してくれるカフェというものは、まさにオアシスそのものである。

洗練されたチェアと時の刻まれたテーブル、照明は少し薄暗い程度がちょうど良い、音楽は、静かならば何でも良い（詳しくないのでこだわりはない）。アイスカフェラッテを注文し、お気に入りの煙草を燻らせながら、手に馴染んだハンディーワープロをカタンカタンと（控えめに）打ち鳴らして執筆する。至極の一時である。ナルシー全開、己に酔いまくることこの上なし。あまりの陶酔に時の経つのも忘れ、会社説明会をすっぽかすこと幾たびか。いや、何も問題は無い。我が生涯に一片の悔いなし。

と、色々と素晴らしいカフェタイムの条件を挙げつらってきた。これらの条件はいずれも上質なカフェタイムには欠くべからざるものである。が、その中でも特に一つ、絶対に欠かせない条件がある。そう「お気に入りの煙草」である。これが断然、いっちゃん重要である。竿が無ければ男ではないのと同じくらい、いやそれ以上に重要である。禁煙の喫茶店なんぞはもはや「カフェ」とは呼べない。「カヘ」である。

ところがどっこい。世の流れは「禁煙、嫌煙」まっしぐらである。それ自体が人権侵害甚だしく、特に現厚労大臣の小○山なんぞはもはや女権運動家どころかレイシストの域に達しておる、と僕は思うのである。が、煙草が嫌いな人にも煙草を愛する人と同様に人権が存している事も事実であり、そこに關しては僕とて何の依存もない。そして、その両者が互いに心地よく共存する為には、（嫌煙レイシスト達は頑なにそれを認めないが）ただ単に「分煙」を推進すれば良いだけの話である。嫌煙レイシスト達にはそんな簡単な話がなぜ分からないのか、僕には全然分からない。分かる人がいたら是非とも説明して欲しいものだ（分煙の行き届いたカフェで、分煙用のガラス越しに電話で話し合おうではないか）。嫌煙レイシスト、奴らの脳内には「憎しみ」と「差別」とがドス黒く渦巻いているに違いない。そして、思いやりの失われつつある社会にとっては、そういうドス黒い感情の方がよっぽど有害であると僕は思う。

で、問題なのは「カフェ」における煙草にまつわる現状である。着実に「カヘ」が増えているのである。ス○バ等は最初から「カヘ」であることを知っているのだから死んでも入らないので問題ないのだが、近年ではスタバ以外にも「カフェ」が「カヘ」に改悪されていることがあり、甚だ迷惑なのである。

この間も、そうとは知らず間違っ秋葉原の「カヘ」に入ってしまった、全席禁煙を食らい、350円すられた。その時はアイスカヘラテを一気飲みし、二分で店を出たが、さすが千代田区、と思った。せめて入り口に大きく「当店は嫌煙レイシスト様御用達のお店です」と明記しておいて欲しい。そしたら素通りするのだから。

ただでさえ安い風俗に通う位しか楽しみのない哀れな素人童貞の、数少ない楽しみを、これ以上奪わないで欲しい。人権侵害どころではない、これはもはや立派な「いじめ」である。国ぐるみの「弱者虐待」である。

そして、煙草吸いの側にも問題がある。まんまと嫌煙レイシスト共の策中にハマリ、「本当は禁煙したい」等とぬかして飼い慣らされ、挙げ句の果てには禁煙し「やめられて分かった、さあ君たちも禁煙しよう」なぞとほざきだす始末である。俺は恥ずかしいよ。元喫煙者達よ、そして禁煙予備群の諸君、俺は恥ずかしいよ。君たちにプライドというものはないのか？もはや君たちには竿も金玉もない、君たちは去勢された犬だ。犬畜生に成り下がりがやがって。貴様等のような奴がわんさかいるお陰で、奴らが増長するんだ。

と、嘆いてばかりいても始まらない。俺もただ頭を垂れて肩身狭く「すいませんねえ」なぞと萎縮してばかりいるつもりはない。理性あり、誇り高き愛煙家として徹底抗戦する。以下、具体的な行動規範を列挙する

- 1、俺はどれだけ値上げされようと頑として止めず、紫煙を吐き続ける。
- 2、生涯愛煙を貫き、多少なりとも喫煙が原因との疑いのある疾病を患った場合、責任として国民医療保険は一切使用せず、全額自費にて医療行為を受ける。それが無理なら、治さずに死ぬ。
- 3、将来、法的に喫煙が禁止された場合、潔く獄に入る。

以上を持って「一愛煙家の闘争宣言」とする。って、全然エッセイじゃなくなっちゃったじゃねえか。まあ、仕方がねえ、これが俺の性分ってもんでな。

先日、いつものようにぬらぬらと仕事をしているときのことだった。仕事はいい感じだった。最低な仕事だけど最高に順調だった。全体的に見て総括するなら微妙だった。完膚なきまでに完全に微妙だった。たとえるなら「40年以内にマグニチュード7クラスの地震が起きる確立は45%」という予報くらいに微妙だった。そんないつも通りの、まるでV6における長野の存在感のように冴えない日にその事件は起きた。

そのときの仕事内容は物を右から左に動かすだけの、脳の溶解をぐんぐん促す素敵な作業。もはやおかゆのようになってしまった脳をタプタプいわせながら「えいやっ」と物を持ち上げた時、首筋にかなりファンタスティックな痛みが走った。全力で走った。結構な重さの物を持ち上げたことで、首の筋というか何かを痛めてしまったのだと思う。「あむでゅううっ！！」わけのわからない叫び声をあげつつ僕はその場で崩れ落ちた。崩落、というよりは崩壊、そんな感じだった。

それからは今に至っても首の痛みと戦う日々が続いている。この痛み、痛めたその日に比べればかなりおさまったものの日常生活にかなりの支障をきたしている。首を動かすと痛いから、後ろから話しかけられたりするとなかなか困る。普通に体ごと後ろを向けばいいのだけど、つつい首を動かしてしまう。人間だもの。確かに同じ人間だけど相田みつおなんか一緒にくたにまとめられるとなんかむかつくね。そうして首を動かすと、首がまたフレキシブルに痛む。痛みで全身が固まる。あう。

そうして痛む首を抱えながらの仕事、首をもっとも痛まないように変な姿勢で変な体勢をとりつつの仕事。それは僕の腰を無情に破壊した。もともと腰は以前から悪いのだけど、それがより凶悪な感じになった。もうもはや服を着る、ラーメンをたべる、土下座をする、といった日常のことまでかなり困難な状況になっていった。

そうして痛む腰と首を抱えながらの仕事、腰と首をもっとも痛まない以下略、今度はひざにまで激痛が走ってきた。駆け下りてきた。満身創痍プレイの始まりである。

そんな私を救ってくれたのは市販の頭痛薬でした。一日9錠、朝昼晩食後3錠ずつ飲むと不思議と痛みがやわらぐのです。もう私はイブAがないと生きていけません。イブAのおかげで人生が変わりました。ありがとうイブA！

しかしそんな僕の幸せも長くつづかなかった。なんでも頭痛薬は飲みすぎではいけないらしい。というか死ぬらしい。そんな情報を入手してしまった。死の恐怖におびえふるえつつ僕は泣く泣く頭痛薬の服用を一日6錠に減らすことにした。知らぬが仏だな。知らなけりゃホントにホトケになってたけれど。

「頭痛薬とウイスキーを一緒に飲むとね、ふわってなっていていい感じだよ」

そう高校生当時の僕に教えてくれたT君は信念の人だ。T君とは小学校から大学までずっと同じ学校に通っていて、お互いに気心の知れた仲だ。T君は幼い頃に聞いた「無駄なものなんて世の中にはない。無駄だって思うものこそが人生を豊かにするんだ」という手垢のつきまくって悪臭放つふざけた人生訓に感銘をうけた。そしてT君はより無駄なことを追及し、無駄な人生を歩むことを決めた。そんな無駄な信念を貫く人だった。そんなT君は周囲から当然理解されず、さまざまな迫害をうけ痛みをこうむった。結果として奇抜な頭痛薬の服用法をするようになったのだろう。

T君は小学生のとき、お菓子の袋にはいつている「食べてはいけません」「DON'T EAT!」と書いてある袋の中身を食べたらどうなるか、そんな無駄な研究をしたくなった。ただ自分で食べるのは怖かったので、彼の弟にかなり暴力に比重をおいた説得をし、大量に食べさせてみた。弟は二週間ほど入院した。T君の人生はこれで豊かになったかもしれないが、弟くんの人生はその分まずしくなった。

T君の家には一匹の犬がいた。今は残念ながら亡くなってしまったのだが、とても人懐っこくてかわいい犬だった。T君はその犬が初めて家に来たとき、「自分が名前をつける！」と言い、譲らなかつた。彼がその犬につけた名前は「キャット」だった。僕がT君の家に遊びにいくと「ワンワン」と元気よくほえながらキャットは僕を出迎えてくれたものだ。T君は自分の愛犬の人生も無駄なものにしてしまいたかつたのだ。

「真のアブラゼミを造る」と宣言して捕まえてきたアブラゼミにサラダ油に浸していたときもあった。意味はわからなかつたがその行為が無駄であることはよくわかつた。その「真のアブラゼミ」をキャットがつかまえて食べていたりした。

ほかにもバツとカマキリをセロハンテープでくっつけて新生物「カマツタ」をつくりだしたり、当時小学校の授業で使っていた友達の30センチものさしをヤスリでけずって28センチものさしに改造したりしていた。すべてが無駄な行為だった。

高校生になってT君は一度、タバコをもっていったと教師に咎められ二週間の停学処分になったことがある。しかしそれは正確ではなかった。T君がもっていたのはタバコではなく錦糸町まで行って買って来た合法ドラッグだった。T君は語った。「タバコは20歳未満が吸ったらいけないって法律があるよね。だから高校生がもってたらそりゃ停学にもなるだろ。でも20歳未満は合法ドラッグをキメたらいけないなんて法律はないじゃん。だから俺が停学処分はおかしいと思うんだよね。」もっともな意見だとは思ったが、何かを根本的に間違えている気がした。それをT君に伝えるのはなんかいやだったから何もいわなかった。

いろいろ書いたがT君は実は勉強はとともよくできる人間だった。うそのような本当の話だ。とりわけ数学的な思考回路はすさまじいものがあり、教師に数学オリンピックの出場を打診されていたほどだ。数学の天才は問題を見た途端、まるでパズルのようにその問題の答えがわかってしまうらしい。T君は「答えはわかるけど、途中式の書き方がよくわかんない」とぼやいていたことがあった。それを聞いてこいつは本当に天才かもしれないと思った。しかしT君は文系コースを迷わず選択した。天才のT君は古文や日本史で赤点をとって補習を受けていた。

そんなT君であるが無事大学も卒業し、大手の銀行に就職した。大学時代、いっさい勉強をせず、マリファナばかり吸っていたT君がなぜ就職できたかはわからない。二十歳をすぎて突然ポケモンにはまり、五反田だかどこかのポケモンセンターに通いつめていたT君。そこでヒントを得たのだろう、ピカチュウと幼女が熱くねっとりからみあう新しすぎるジャンルのマンガを書いて同人誌にのっけたりしていたT君。そんな獣・じゃないかポケモン姦マニアの彼でも就職はできたのだ。

そんなT君は先日、銀行を辞めた。銀行には無駄がないかららしい。今T君は障害を持つ子供のために働く職に就きたい、と目標をさだめ勉強にはげんでいるらしい。

T君は語る。「障害者ってさ、世の中の無駄じゃん。いなくていいじゃん。だってそんなの埋めちゃえばいいわけでしょ？そんな奴らの世話する仕事ってマジで無駄だよ。その無駄な感じがいいの。いなくていい感じがいいの。無駄と無駄があわさってより強固な無駄になるよね。ちなみに俺の目標にしてる人物はね、まあ俺なんかにはなれないけど、前総理やってた鳩山だから。あんなに無駄のかたまりみたいなやついなかったよね。本気で尊敬してる。あっ頭痛薬飲む？」

障害者のために働くという彼のやってることは素晴らしいと思ったが、彼の理念は激しく間違えているとおもったが、それをT君に伝えるのはなんかすごくいやだった。

なんか頭痛薬という単語から変なことを思い出してしまった。体中すでに痛いのに頭まで痛くなってきた。でも10代後半とかの時期に「自分探し」とかやりだして拳句「世の中のために役に立ちたいです」とか言っちゃうやつらも無駄さにおいてT君と変わらないなあとも思う。もう二十歳すぎてるのに自分のことを「～女子」「～男子」とかいつっちゃうやつらの存在も無駄。そして電子書籍で雑誌とかつくっちゃうのも無駄。世の中なんでこんなに無駄が多いかなあと首をひねったら激痛で、あう。

~~~~~

(↑オパーリンの感想)

「たばこほど無駄なものはないけれどもね。無駄のようにみえるものを、どこまで許容し得るか・・・それが文化でしょう」これは池波正太郎の言葉である(『グレート・スモーカー』より)。この社会においては「いかに無駄をなくすか」が非常に重要な命題として我々の頭の中に刷り込まれてる。みんな、無駄をなくすことに「しゃかりき」になっている。みんな。このしゃかりきの努力が実り、もしこの社会に無駄なものが何一つ無くなったら、みんな最適化され、一切の無駄のない究極の人間になる。つまり、みんな同じ一つの形体に至るということである。無駄のない人間、それはみんな同じ顔、同じバストサイズ、同じチンチンの長さ、という事である。

違う部分、共通から外れる部分、そんな所にこそ「僕」であり「貴方」である所以が宿っているのである。だから、人が誰かを愛する時、彼、彼女はその人の「無駄な部分」をこそ愛しているのである。つまり、無駄が無くなれば愛も無くなり、僕と貴方の間には何の違っても無くなる。そんな世界はまっぴらごめんだ。

だからこそ、僕が僕であるために、貴方が貴方であるために、無駄を愛し、無駄な事をしよう。東町氏の文章を読んでそう感じた。

## 「アンパンマンとキリスト教」 多良鼓

アンパンマンが自らの顔をちぎり、お腹を空かせている人々に分け与える。誰でも一度は見たことある光景だろう。このような姿は現実世界でもまれに見られる光景だ。もちろん顔をちぎることでは無い。すなわち、マザーテレサ等に見られる「自己犠牲による献身」だ。この自己犠牲による献身は、キリスト教の教義として非常に大切にされている。すなわち「神を愛し、隣人を愛せよ。」である。アンパンマンの作者であるやなせたかし氏が敬虔なクリスチャンということもあるだろうが、アンパンマンにおける正義は、キリスト教のそれと非常に似通っているように見えるのだ。

しかし、ある一点、まったく異なっているところがある。それは「その正義を行う目的」という点だ。ここを強調することで、アンパンマンにおける自己犠牲とキリスト教における自己犠牲は全く異なっていることを、私は主張したい。

キリスト教の教義は、上述したように「神を愛し、隣人を愛せよ。」これだけである。もちろん、どのようにすればよいかは細かく決められている（しかも宗派によっても違う）が、中心教義は全くこれだけなのである。では、キリスト教を信じ、この教義を遂行するのは何故か。簡単だ。「死後、神の国へ転生するため」だ。宗教は大きく「集団救済宗教（ユダヤ教・儒教など）」と「個人救済宗教（仏教・キリスト教・イスラム教など）」に分かれ、キリスト教は個人救済を目的とした宗教なのである。各人が、死後の世界の己を救うために、現世で隣人を愛するのである。

対して、アンパンマンの自己犠牲はどうか。彼は自己犠牲に見返りを求めている。現世でも、そして死後世界でもだ（あるかどうかは謎だが）。大体、アンパンマン自体が自己犠牲をそのままキャラクターにしたようなものだから、もはや自己犠牲そのものが目的となっているのは仕方が無い。では、自己犠牲によって達成される目的とは何か。アンパンマンは劇中で「みんなのことが大好きだよ」といったセリフを口にすることがある。この「みんな」には、ばいきんまん（片仮名ではなく平仮名）も含まれているのだ。その証拠に、ばいきんまんが悪さをしない時には素直にほめたり食べ物を分け与えていたりすることがある。あくまでも献身することが主目的であって、ばいきんまんをぶっとばすのはアンパンマン世界における道徳観念に反した時のみなのである。アンパンマンの自己犠牲による献身には「己の正義（それは作者の正義でもある）を貫く」という動機があり、それによって達成される目的は「他者を救う」それだけなのだ。正義を行う目的は、あくまでも他者のためであり、自分は含まれていないのだ。

これらから、それぞれの活動目的が「自己」か「他者」かという点で、アンパンマンの自己犠牲とキリスト教の自己犠牲は異なっていると言える。この見解が非常に浅く突っ込みどころ満載なのは百も承知である。アンパンマンの活動も「己の正義を貫くことによって自らのアイデンティティーを守る」といったところまで還元してしまえば、「自己」を目的としているとも言える。正義とは考えるのも行うのも実に難しい。せめて、自然に献身を行うことができる成熟した人間になれるよう、努力を怠らないようにしよう。などと教訓にも駄文の言いわけにもならないことをほざいて、閉めとさせていただきます。

### 追記 1

アンパンマンはキリスト教徒ではなくいわゆる「神」ではないかという突っ込みが来そうだが、その点についてもノーだと言わせていただく。キリスト教における神は全智全能であり、もはや人間が考える善し悪しのものさしでは測れない、測ってはいけぬ存在だとされる。アンパンマンが行う善行とは、「食べ物を分け与えること」「他人をいじめないこと」というヒューマニズム的なものであり、その点で人道的なものさしに押しこめられるものと言える。しかしキリスト教だと「異教徒は人ではないので殺してもいい」という神と聖書を絶対にする特別な道徳内での善行なので、アンパンマンの善行とは相いれないのだ。神の思し召しとは、「お前がもっと私に愛を示せるように手伝ってあげましょう」という意味合いのものなのである。

### 追記 2

なにか、キリスト教に対して悪いイメージを持っているような文章になったが、そういう感情は抱いていないことを申し上げておく。キリスト教における愛とはアガペーであり、無価値とも思える人間をも愛する無条件の愛である。そのような極端な思想に因る殉教は人々に激烈なエネルギーを起こさせ、その産物として我々が息づく近現代が作られたという歴史がある。そういう意味で、キリスト教とは良くも悪くも凄まじい宗教である、というイメージを持っていただけたら幸いである。

~~~~~

(↑オパーリンの感想)

アニメの次はキリスト教ときたか、しかもアンパンマンとの比較考察、やるな。と、多良鼓氏の幅の広さを感じながら読んだ。日本だから良かったものの、これをキリスト教万世な国で書いていたら、それなりにヤバい事になるのかもな、なんて思ったりもして。少し記事の内容に言及すれば、アンパンマンの自己犠牲の精神って、実際のところその根源がどこにあるのか分からないよね。「何のために彼は甘んじて食われるのか」っていうその部分、もうちょっと突っ込めば「何が楽しくて文句一つ言われずに食われるのか」って言う事。彼のやる気の源が分からん。アホなのか、DMなのか、メシアなのか。多良鼓氏の文章ではメシアとの相違点について言及されており、頷ける部分も多いので、やはりアンパンマンはDMか真性のアホなのだろうな、と思う。

で、DMの線は薄い様な気がする。あいつ、食われても悶えたり悦んだりしないもんね。というわけで、アンパンマンは真性のアホ、完全なる無垢とでも言おうか、そう言う感じだから、あんなに食われても文句一つ言わないんだろうね。

で、キリスト教について。一括りに「キリスト教」と言っても本当に色々な宗派がある。最近では米共和党大統領候補だったか、のロムニーさんがモルモン教徒（キリスト教の一宗派らしいよ）だっていう事がテレビで解説されてたな（歴代大統領は殆どプロテスタントらしい）。で、キリスト教について考える時には、そういった一個一個の宗派について考えてみるのも面白い。

例えば、前大統領のブッシュが信じていたのは福音派と呼ばれる宗派で、この福音派については松島×町山の未公開映画を見るTVでやっていた（DVDにもなっている）『ジーザス・キャンプ～アメリカを動かすキリスト教原理主義～』という映画が面白い。信徒の親は子供を教育現場から隔離し（ダーウィンの進化論を教えさせないため）、自宅で創世記を教育する。福音派の洗脳キャンプに参加させる。などなど、原理主義と言われる宗教の香ばしさがビンビンと伝わってくる作品である。

日本でもオウムを筆頭として、カルト宗教が問題視される事って結構あるんだけど、実際にはみんなよく知らないんだよね。その危険性を理解する為にも、教育課程の中に（カルトを含む）現代の宗教を扱う授業を行った方がいいと思うんだよね。被害にあう無垢な大学生とかも、未だにいっぱいいる訳なんだし。特に僕の所属している筑波大学の周辺なんて、やばいカルトがウヨウヨしている。そうだな、てっとり早くカルトの恐ろしさを知りたい人には園子温監督の『愛のむきだし』がおすすめ。これは超有名な某カルト教団をモデルにしている。

ここまで熱心に危険性を説いてきたが、これを読んでいる大抵の人は「ふーん（私には関係ないや）」でやり過ごしてしまうだろうと思う。「日本は（実質的には）無宗教の国」だなんてよく言われることだし、良し悪しは別としてそれは確かにその通りな面もある。だが、ここでは「宗教」の捉え方を少し僕なりにアレンジして、その点について考え直していきたいと思う。

「宗教」というと、日本人は「無宗教」なのかもしれないが、「依存」といえばどうだろうか？自分の拠り所となるもの、自分が自分であることを支えてくれるもの。一流のサラリーマンなら自分の「キャリア」、社長や投資家なら「金」、キャバ嬢も「金」か、ヴィッチなら「男根」、教育熱心なママは「息子」ようするに「男根」なのかな。とまあ、人それぞれ色々あるんだろうけども、社会だったり、金だったり、恋愛だったり、大抵の人は自分という存在を支える為に何か「依存」していると思うんだよね。「俺は俺、何にも頼らない」なんていう無頼派な人もいるんだろうけれども、そういう人はやはりどこか難儀な人生を送っている気がする。

で、それぞれの人が「依存している対象」っていうのは、その人にとっては「信じられるもの」なのであって、ある意味宗教に近いというか、その人にとっての「宗教」なのだと思うんだよね。さしあたり日本人は「みんなと同じじゃなきゃ駄目」教の信者が一番多い気がするがね。

ここからまとめ。大抵の人は自己、自我というものを維持する為には何らかの「宗教的なもの」が必要。ただ、その信心の対象が、人それぞれに違うことから問題が生じることがある。また逆に、みんなが余りに同じものばかり「信じる」と、同調圧力が生じて、マイノリティーの弾圧が起きたりもする。つまり、人が何かを「信じる」限り、問題が生じる。で、ここで「じゃあ、果たして自我なんて必要な？」と言いだした人がいる。僕にはその発想は無かったので、その問題提起をされた時は相当なショックを受けた。そして、未だに「自我が必要かどうか」という問いに対して、僕の中では答えを出せないでいる。ちなみに、僕にその根源的な問いを投げかけたのは伊藤計劃という作家で、彼の『ハーモニー』という作品を読んだ事だった。

「限りなく胡散臭い就活の「抽選」」 オパーリン

就職活動をしている。すると、企業の開催する説明会とやらに足しげく通う必要がでてくる。で、この説明会、誰も入りたくないような会社のそれである場合、何ら問題はない。人が集まらないだけである。その一方で（給料が高いから）人気の会社の場合、みんな張り切って応募し、その結果、人が殺到し、とても希望者全員を収容する会場なんて用意できない、と言う事態が発生してしまう。

で、人が殺到する説明会の場合、企業側は主に2種類の対策を講じる。そのどちらも人数を減らすと言う点においては共通である。まずその対策の1つ目、先着順である。定員に達したら締め切ってしまう。この場合、申し込み開始から応募が殺到し、ほんの僅かな時間で定員に達してしまう。僕もこの先着順のせいで未だに参加できていない説明会が沢山ある。でも、まあ仕方ない、平等だもの。

対策2つ目、抽選である。で、今回僕が問題視しているのはこの「抽選」が「抽選ではない」ということについてである。なぜ「抽選ではない」のか。それについて書く前に、僕が説明会の抽選が「抽選になっていない」と思うようになった原因について書く。

僕もまあ、それなりに就職活動をしているので、説明会の「抽選」に応募することになるわけですよ。5、6社は応募したかな。で、問題なのはその結果なんだな。あのね、例外無く全部の抽選に「当選」しちゃっているんだよ。すべて当たる抽選とか、そんなものはや抽選じゃないだろ、と思うわけ。で、ここから2つの事が考えられる。

1つ目は、人気もないくせに「抽選（笑）」をする企業について。冒頭では「人気のある企業が抽選をする」と書いたが、実は誰も知らない様な中小も、説明会に際していっちょ前に「抽選（笑）」を行っている場合が少なからずある。で、「抽選（笑）」に受かって、行ってみると学生が7人しか来ていなかったというケースが実際にあった。本当に笑っちゃうよね。これは「抽選」って言って、「うちは抽選しなきゃいけないくらい人気企業なんですよ」、「あなたは選ばれた特別な人ですよ」っていうプレミア感をだして学生を集めようって言う魂胆だよね。後は抽選じゃないんだけど、「もうすぐ満席、あなただけに特別にご招待」的なメールをやたらに送ってくる会社もあったな。そこは電話までかけてきたな。で、行くと会場はガラガラなのね。その時点で、もう説明以前に行く気無くすよね、嘘ついてるんだもん。素直に「うちの会社は説明会開いても誰も来てくれないようなゴミ企業です。でも、会社を良くしたいんです。だからみなさんの力が必要です。お願いしますから来てください。」位の事を言えばいいのに。そうしたら「お、今時珍しい正直な企業だな」ってなって、逆に人気が出ると思うんだけどな。まあ、俺は行かないけど。

で、2つ目は人気企業の「抽選（怒）」について。これは明らかに学歴差別でしょ。名前も知らないような、どこも欲しがらない大学の学生をはじくための「抽選」だろ。証拠はないけどさ。じゃなきゃ全部受かるとか不自然きわまり無いことが起こるはずがない。さっきの「人集め抽選詐欺」もおかしいが、こっちの「学歴差別抽選詐欺」の方がもっと許せないな。学歴差別をするのが悪いんじゃない（悪いが）、「うちは平等に採用してます」と嘘をついて善人面するのが悪いんだ。正々堂々と「うちは学歴差別をします、馬鹿は事務処理が面倒なんで受けないでください」と言えよ。そこまで開き直る潔い企業があれば、俺は間違いなくそこを受ける（仕事が楽で給料の高い企業限定だがな）。

結論として俺が言いたいのは「平気で嘘つくな。そのくせに「成長」だとか「夢」だとか綺麗事をぬかすな」ということだ。はやく詐欺罪で摘発して欲しい。

「自己啓発嫌いの弁」 オパーリン

「自己啓発本」なんかを読んでいる奴に限って、肝心の啓発すべき「自分」に何の個性もない、薄っぺらい奴だからしょうもない。ずっとそう思ってきたし、大半の良識ある大人は僕と同じようにそう考えているものだと思っていた。しかし、就活を初めて、色々な「社会人」に会うにつけて、その認識に自信がなくなってきた。僕の「自己啓発はゴミ」という認識が変わったのではなく、「まともな社会人もそう思っている」という認識に自信がなくなった。

具体例を挙げていこう。こないだ行った会社説明会の企業紹介パンフレットに「社長のおすすめ本」というコーナーがあって、そこには自己啓発本がずらりと列挙されていた。あと、もう一つ。これまた別の会社の説明会なんだが、その人事部の人が学生に向けて「生き方」について、頼まれてもいないのに勝手にアドバイスを始めた。で、彼はそのアドバイスで「これは僕が好きな自己啓発本という言葉なんですけど」と自慢げに前置きし、その本の内容を読み上げて、アドバイスを終わった。

自己啓発本コピペアドバイスには、ほとほと呆れた。「お前の言葉」で語れよと思うのはもちろんの事、そのコピペしていることを自慢げに宣言するとは、少しは恥ずかしがれよ。「僕は何の中身もない空っぽ人間です」って宣言しているようなもんじゃねえか。ちなみにそのコピペ社員は「俺はとにかくアツイ男」「金八が大好き」とも宣言していた。合同説明会での出来事だったから、2000人弱の学生を前にして、そんな羞恥プレイをやったのけるとは、相当なドMなんだろうな。

と、ここまでいくと極端なケースなのかもしれないが、ビジネスマンは自己啓発本を読むのが普通なんだろうか？そこまでして自己を破壊し、「均質」で「理想的」な「人材」に作り替えなきゃならんのだろうか。もしそうなのだとしたら、何とも気持ち悪い世の中になったもんだな。反吐が出るわ。

社会人に限らず、学生のうちから早くもそういうのに染まっちゃってる奴いるもんな。「意識の高い学生」とか言うんだろ、俺には「社畜適正の高い学生」に聞こえるけどな。俺のフェイスブックにも一人そういう学生が友達登録されていて（確か気持ち悪い人材教育コンサルの説明会で知り合ったのかな）、そいつの発言は毎回笑わせてくれる。彼の発言には、夢、出会い、成長、ポジティブ、感謝、熱意、等々の単語が連発され、というかほとんどそれらしか出てこない。全体の語彙は極端に貧弱、発言内容は具体性に欠け、抽象的、等々の特徴がある。一貫して言えることは、彼の発言は読んでいる人にとっては何の役にも立たないどころか、毒にすらならん。つまり、何も言っていないんだよ。そういう人達って一生気づかないんだろうな、自分が恥ずかしいと言うことに。で、他の人にその自分の「前向きな」生き方を押しつけ続けるんだろうな。

と、さんざっぱら悪口を書いてきたが、なにも俺は悪口を書きたかったわけではない（まあ、書きたかったんだけど、それだけじゃないってことね）。俺がそういう奴らに言いたかったのは「目を覚ませ」ということだ。自己啓発にハマる奴からすれば「余計なお世話だ」と言うことになるのだろうが、こっちからすればカルト宗教にハマる奴を放っておけないのと同じ様な気分なのである。まあ、それすら余計なお世話ではあるのだろうけどね。カルトもそうだけど、ああいうのって自分一人じゃ不安なもんだからって他人にまで広めようとするじゃん。あれが迷惑なんだよね。だからやめて欲しい。「前向き教」は一人で勝手にやってくれ。

最後に自己啓発とかカルトにハマる奴の特徴を書いて終わりにする。思い当たる節のある人は気をつけるなり諦めるなりしてくれ、とにかく「自覚」してくれ。

特徴1、「素直」。なんでも人から言われたことを鵜呑みにして信じてしまう。まず、「自分」というフィルターに通してから、それが正しいかどうか判断しろ。まあ、その「自分」が無いのから騙されるんだろうがな。

特徴2、「自信がない」。だから、それを見抜かれてつけ込まれるんだよ。自信の付け方は、、、知らん。自分で考えろ。とにかく、自己啓発やカルト宗教では本当の「自信」は得られないと思うぞ。ああいうのは「自己破壊」してまっさらにしといてから、支配する奴らにとって都合のいい、「均質な自己」を刷り込まれるからな。それはもはや「自分」ではないだろ。

特徴3、「寂しい、仲間が欲しい」。孤独に耐える訓練をしろ。群れるな、見苦しいから。

と、挙げればきりが無いのだが、これくらいしとく。日本が本当に終わるのは、自己啓発にハマっちゃった奴らがマジョリティーになって、そうじゃない奴らを迫害しだした時だ、と俺は思うぞ。多様性が失われた時にその「種」は滅びるんだよ。終わりの始まりはもう始まっているとも思うがな。

—追記—

同じ事を考える人はいるもので、先日『「自己啓発病」社会』（宮崎学著）という本が祥伝社新書から発売されたいるのを知り、喜び勇んで購入した。ちなみにこの本の初版発行日は2012年2月10日なので、この記事の方が先に文章にしたのである、と競ってみても仕方がないのではあるが。

調べてみると、宮崎学氏自体も非常に面白そうな作家なので、すかさずブックオフに行き二冊ほど彼の著作を買っていた。詳しくは来月号（月オパ12年2月号）の読了リストコーナーで書く事にする。（2012年2月14日）

「雑誌「前夜」について」 オパーリン

何だか宣伝文になってしまいそうな、そんな嫌な予感を感じながらこの記事を書き始めている。しかしまあ、広告料を頂戴している訳でもなく、くれるはずもないので（貰えるのならぜひ欲しいが）、気にせず書く事にする。見過ごせない事態が起こってしまっているのだからな。

この間、何とはなしに書店をブラブラと徘徊していた時の話である。雑誌のコーナーで満島ひかりが表紙の雑誌を見つけ（最近では珍しい事ではないが）、手にとった。その雑誌は「前夜」とう名前、創刊号だそう。小林よしのり責任編集、とある。少しビビっときながらも平静を装い、出版社を確認する。幻冬舎、さすが。

パラパラとめくる。良くも悪くも小林よしのりらしい紙面である。満島ひかりと小林よしのりの対談もある、園子温も呼んでくれれば最高だったのにな。とか思いながら、どんどんページをめくる。

中綴じグラビア、照沼ファリーザ。キタぁー！！発狂して喜ぶ。分からない人のために説明しよう。写真家、照沼ファリーザはAV女優、晶エリーちゃん（大沢佑香）の別名である。それでも分からない人は、ビデオ屋さんにレンタルしに行ってください。僕は写真のことはよく分からないのだが、エリーちゃんがタコに絡み付かれてる。キャわいい。天使。ファリーザちゃんが撮るエリーちゃん、最高や。と立ち読みしながらデレデレしまりである。しかし、買わずに棚に戻した。2ページだしさ、それに千円ちかく出すのは、さすがにキツイしな。

小林よしのりのハイセンスぶりに脱帽すると同時に、照沼ファリーザ、満島ひかり、小林よしのりが同じ雑誌に共演しているという事態に興奮しまくりであった。僕の数少ない好きな人同士が「繋がる」という稀有な体験だった。そういう時、は滅多にないのだが（何故か最近多いのだが）、素直に嬉しい。

最後に、エリーちゃんに応援メッセージ（月オパ読んでくれ！）。最近では写真家として活動したり、テレビに出たり、と幅広く活躍してくれていて、ファンとしてはエリーちゃんを見る機会が増えて非常に嬉しい。もっとメジャーになって、映画とかにも出てくれればいいな、なんて思っています。以上、エリーちゃん萌え記事でした。

「文章というタイムカプセル」 オパーリン

2011年7月26日。小松左京が没した、というニュースを知り、「そう言えば、読んだこと無かったなあ」なんて思い、以後本屋をぶらつく度に彼の作品を探すようになった。しかし、没した直後、彼の本は全く一冊も書店においてなかった。ブックオフにすら無くて、かろうじて『日本沈没』の下巻のみを買う事ができたに過ぎなかった。

無いと余計に欲しくなるというのが人間の性分であり、以後僕は「小松左京読みたい病」に罹った。小松左京について少しだけ書くと（詳しく知りたい人はウィキレ）、筒井康隆、星新一と共に「SF御三家」と並び称される日本SF界の草分け的作家であり、代表作の『日本沈没』は映画化されているし、当時は社会現象になり、影響を受けて自殺しちゃった人もいたとかいないとか（年末に祖母の家に行った際に、僕の伯父さんが「近所の人で自殺したった人がいる」と言っていた）。まあ、けれの経歴等については、僕もズブの素人だし調べれば分かることなので、ここで詳しく書く意味も無いだろう。

で、彼の小説が読めないまま数カ月が経ち、ついこないだ就活ついでに池袋のジュンク堂に立ち寄った。ありましたよ、出ましたよ、河出文庫『小松左京セレクション1日本』東浩紀編。即買い。東浩紀編ってところもポイントなんだけど、それはまた別の機会に。で、この他にも追悼キャンペーンがはられているみたいで、ムック本なんかも出ているみたい。金が入り次第、即買おうと思っているよ。

で、待望の小松作品に触れての感想を少しばかり。僕は筒井康隆が好きで、彼の本に関しては20冊以上は読んでいる（それでも超多作の筒井氏の作品の全体からすればごく一部なんだろうが。ちなみに小松も超多作だ）のだが、小松の文体は何処か、筒井のそれと似ているというか、関係があるなあと思った。同じじゃなくて、全然違う所も多いんだけど、例えば筒井康隆の皮肉っぽさとかはないんだけど、でもどこか無関係とは思えないんだよな。で、遙か昔に読んだ星新一の文体を思い出そうとしてみるんだけど、それも何となく似ている様な。あ、星新一も再読しなきゃな。

三人はお互いにお互いの作品を読んでいたんだろうから、少なからず影響を及ぼし合っているところはあったんじゃないかなあ、と勘繰ってみる。地の文での状況の説明の仕方が、似ている様な気がするんだよな。ま、いっか。

ただ、こうして感想を書いていて思ったのは、小松左京の作品は膨大すぎて、なんだか小松左京を「小松左京とは」と一括りにして考えることが無謀な気がしてきた。もうちょっと勉強が必要みたいである。

ということで小松左京についてはこの位にしておいて、彼が書いていたSFというジャンルについて少し。これまた奥が深く僕は初心者という状態なんだが、まあ、無謀にも挑戦しよう。大雑把にいく。

大雑把に言えば、SFは未来について、現時点での可能な限りの推量という事になるんだと思う。という事は、今書かれているSFは未来予測という側面を持つし、過去に書かれたSFは、その作品が設定した年代の読者にとっては「過去からの手紙」な訳だろ。あたりまえだけどさ。で、小松に限らず、昔に書かれたSFを2012年に生きている僕らが読むという事、それは彼らの未来予測が当たっているかどうかの検証、といったこと以上の意味を持つんじゃないかと思う。

どういう事かというとき、混迷する「今」という時代をどう生きればいいのか、かという事への示唆を与えてくれる「道標」的な意味もあるでしょう、という事。

何だか説教臭くなってしまったが、考えてみればこれはすごい事なんじゃないか、というね。「昔」の人が書いたものが遺されていて、「今」僕らが読めるという事。それは「今」僕が書いたものは、「今」を生きている誰かさん達に向けて書いているんだけど、それが保存される限りにおいては、未来の奴らに向けてもメッセージを発信しているというね。勝手に「託す」事ができるんだね。

そう考えると「誰も書いてくれなんて言ってねえしなあ」と不安に思いながら、こうやって駄文を書き散らかしている僕の苦労も、何か報われる気がするというか、「おっしゃ、書けずえ」とやる気が湧いてくるんだよな。

最後に、「文章は遺（のこ）る」という卑近な例を挙げてこの文章を終わりにしたいと思う。以下に引用するのは、僕が小学校の卒業文集に書いた文章。就活で実家に戻っているので、本棚で埃を被っていたのを引っ張り出してきた。恥ずかしいこと極まりないが、当時の僕は未来の僕がそう感じるとはつゆ知らず、自信満々に書いていたように思う。誤字脱字も含め、そのまま引用しよう。

「十二歳のぼくが考えた未来」

未来のぼくに送る。

未来ってなんだろう。未来のぼく、あこがれの未来。未来のぼくはなんになっているだろう。学者？パイロット？作家？それとも、フリーター？それとも、ホームレス。

未来のぼくは今のぼく。今のぼくが作るもの。今のぼくはがんばっている。だからきっと、未来のぼくはすごく幸せ。

未来のぼく、きみが幸せだったら、今のぼくのおかげだぞ。きみが不幸だったら、ぼくのせいだよ。でも今のぼくは、未来のためにがんばっているから、きみは幸せだと思う。

きみも、もっとさきの未来のためにがんばるんだ。めんどくさいよ。なんて言っちゃだめ。だって、きみは、過去のぼくのがんばりの結果なんだからね。

未来のぼくは、今のぼくが作る。今のぼくは、過去のぼくが作る。ややこしいけどすばらしい。そう思うだろう。未来のぼくよ。

未来って、不思議。不思議だから、すばらしい。それに、とってもすてき。はやく行きたいぼくの未来。すごくたのしみぼくの未来。

未来と過去。表裏一体。つながっている。つながっているから、連帯責任。だ、か、ら、しん重にいこう。なにごとともよーく考える。

これを読んだ未来のぼく。きみが、つらいこと、苦しいことにぶち当たっても、のり越えるんだからがんばって。がんばりすぎてくじけそうになったら、これをまた読むといい。きっと元気が出てくるよ。きっと勇気が出てくるよ。

(初出、2001年東京都足立区立梅島小学校卒業記念文集)

「23歳の僕」から「12歳のぼく」へ。すまん、しくじったわ。「23歳の僕」から「未来の僕」へ。すまん、しくじったわ。

「繋げる男」 オパーリン

東浩紀、と言ってどのくらいの人知っているのだろうか、文系の大学生なんかはみんな知っているのだろうか。最近では誰がどのくらい有名なのかが良く分からなくなってきた。で、どんな人なのかというと、思想家だそうだ。肩書きはその他に、批評家、教授、作家、等色々ある。まあ、ウィキレ。

僕が東浩紀を知ったのは1年前くらいかな。田原総一郎の「朝生」に出てて、何か変なおっちゃん（パネリスト）に「出てけ！帰れ！」とマジギレされてた。流れるには東氏は全然悪くなくてそのジジイが勝手にキレただけなんだけど、東氏はそのジジイにうんざりしたのか本当にスタジオを出て行っちゃったんだよね、後で帰ってきたけど。で、そこから面白い人だな、って気になり始めて、『クオントム・ファミリーズ』っていう小説を読んだ。

その後もずっと気になって、ツイッターをフォローしたりした。彼は彼をディスる人とよくマジ喧嘩してて面白い。で、最近になって読んだのが『郵便的不安たちβ東浩紀 アーカイブス1』。初期の論考を集めた本なのかな、確か。僕は哲学には疎いので、そちらの方の文章は結構難しかった。それでも、ポストモダンの概要程度は（ほんと大雑把には）知り得た。

で、彼はサブカルチャー（アニメ）についても論考を行っていて、そっちの方は普通におもしろかった。その中でエヴァンゲリオンについての文章があって、それを読んだら見たくなっちゃった。今まで機会がなくて見てなかったんだよね。それで、テレビアニメの放送から実に16年の時を経て、観ちゃったよ。

エヴァンゲリオンについて。いざ見始めたら、ものの見事にハマリ、別エンディングの映画を含めて、一気に観た。すごく面白かった。普段はあんまりアニメは観ないんだけど、こんなにハマったのはナウシカ以来だな。マンガも全部買い、セブンで売っているカード付きのウエハースも4つ買った。今更僕がここでエヴァの内容について語るのは野暮に過ぎるというものなので詳しくは書かないけれども、シンジのキャラが好きだったな、映画でアスカの事をオカズにして後で自分で傷つくヘタレっぷりとかがウケる。

で、話を東浩紀に戻すと、この人最近、小松左京の作品集の編集とかもして、あんだけ探しても見つからなかった小松作品があっさり読めるようになったのもこの人のお陰なのである、謝謝。

小松に限らず、僕が読書を進めていると至る所で東浩紀が顔を出すのである。阿部和重の『インディヴィジュアル・プロダクション』の解説にもでてきたし、伊藤計劃の『ハーモニー』の解説でも伊藤が東浩紀と交流があったことが書かれているし、朝日新聞の「耕論」欄でオウム真理教特集をしていたときも文章を書いていたしなあ。ことごとく僕が行く道に、先に足跡を付けられているんだよなあ。後追い感が半端ない。

先述の『郵便的不安たちβ』の後書きで、東浩紀は「バラバラに分断されたポストモダンの世の中で、今までずっと僕は僕の書いた文章が、分断されたそれぞれの小さなコミュニティーを「横断」するように「配達」されるべく努めてきた。」というようなことを述べているんだよね（そのまま引用したわけではなく、僕なりに解釈した内容だけど、誤読があれば申し訳ない。まあ、彼は「誤読、誤配を含めて届けたい」とも言っていたような気がする）。そういう意味においては、東浩紀の書いた文章（テキスト）は今、色々な場所から僕に向けて配達されまくっている。そして、彼の文章や彼の紹介する作家たちを知ることによって、僕はいわば東浩紀の「視点」を拝借し、彼の目から見た「世界（のほんの一部）」を垣間見ている訳である。そのほんの一部ですら、ついていだけで精一杯（いや、置いて行かれっぱなしか）で、到底理解など出来てはいないのだろうけれども、で、そうやってやっとこさ垣間見た彼の「世界」は豊穣極まりないのである。

ということで、この文章を通じて（つまり僕を通じて）、彼のテキストがこれを読んでいるみなさんに「転送」されればいいな。と思う、けふこのごろなのである。

「王国の印刷革命～『アダバナ』刊行にあてて～」 オパーリン

正月、実家へ帰り、一族が祖母の家に集い、過ぎ去りし一年を思い、これからの一年に備える。毎年恒例の事である。僕は今年の4月で24になるのであるが、一応「学生」であるという事で、恥ずかしながら親族からお年玉を頂戴した。前回の正月に貰ったお年玉は新年早々に「柔らかいマッサージ」に費やしてしまい、「ごめんよバアバ」と思いながらも癒楽に身を任せるというクズっぷりを発揮してしまったのであったが、今年は心機一転、年甲斐も無く折角頂いたお年玉なのであるからちゃんと役に立つことに使おうと決心したのであった。そして、その決心の賜物、購入したのはモノクロレーザープリンターである。

この月刊オパーリン王国を創刊してからというもの、毎月毎月自宅のインクジェットプリンターで大量の印刷物を捌いておったのだが、なにぶん家庭用プリンターであるため、（印刷速度が）遅い、（インク代が）高いの二重苦であった。そこで今回購入したのがSOHO（自営業者）向けのレーザープリンターである。レーザープリンターとは、要するにコンビニのコピー機と同じ方式のプリンターであり、インクジェット方式と比べて断然に早い、ランニングコストも安い。

で、正月明けに注文したプリンターがアパートに届いた訳ですよ。早速梱包を解くと、現れましたよ、奴が。武骨、まさにこの表現がぴったりだよ。愛想のかけらも無い、その上学生のアパートに置くには余りにもでかい。まあ、覚悟の上だったので問題は無い。彼を設置するスペースを確保する為に部屋の模様替えまでして待っていたんだから、悦びはひとしおだよ。折角だから名前でも付けてやろうかしらん。何がいいかな、そうだな、うーん……。 「武骨」、これでいい。今日から君は「武骨」だ。これからどんどん、頑張って王国の出版物を印刷してくれたまえ。

ということで、武骨の設定を済ませ、いざ記念すべき初印刷。何を印刷しようかしら。なーんて悩むことは無い。既に用意してあるんだよ。フッフッフ、この日のために正月はパソコンに向かい、『オパーリン作品集1 アダバナ』の編集を行っていたのだ。この『アダバナ』は、僕が今までに書いてきた小説4編をまとめた短編集である。総ページ数104ページ、まさにこの武骨の性能を試すにはもってこいの代物なのである。

「っしゅー！！ごらぁー！！」等と嬌声を上げながらワードを立ち上げ、印刷ボタンを「ポチ」っとな。が、しばしの沈黙。チカチカ、部屋の蛍光灯が点滅（毎回起こる、武骨が大量の電気を消費しているからなのか）。次の瞬間、「ブウイイイイーーン」。家庭用プリンターでは考えられない様な轟音をとどろかせ、武骨が始動した。ガッチャン、ガッチャン。武骨はものすごいスピードで紙を吐きだしていく。そして104ページの大作『アダバナ』はものの2分程で刷り上がった。ちなみに以前使っていたインクジェットプリンターでは1部するのに軽く15分はかかった。ちなみに現在、インクジェットの方は表紙印刷専用機として働いている。

とにかく、ものすごい性能である。ノンストレスどころか、製本が間に合わない程である。こうして、武骨の加わったオパーリン王国印刷局は量産体制に入ったのであった。後は地道にコンテンツを作るだけである。

お前、悩んでんだろ？

題字 弦楽器イルカ

『お前、悩んでんだろ？』 企画趣旨

悩み多き（と勝手に判断した）芸能人等のお悩みを、（頼まれてもいないのに）自称伝道師※が愛情を持ってときに厳しく解決するコーナー。

※伝道師（でんどうし） 1、キリスト教の聖公会・プロテスタントの教職の一つ。2、転じて、他人に何事かを熱心に勧める人。

今月の被害者

M嶋ヒロ

略歴（ウィキペディアより抜粋）

父親の仕事関係で、幼少時代から小学校卒業までスイスのチューリッヒで過ごしていた帰国子女。中学入学にあわせ帰国。中・高ではサッカー部に所属し、高校3年生のときに出場した全国高校サッカー選手権大会ではレギュラーのMFとして活躍、ベスト4に進出。高校卒業後はK應義塾大学に入学。在学中、先輩からモデルの仕事を紹介され、その後、俳優としてドラマ・映画などで活躍。2010年10月、第5回Pプラ社小説大賞を受賞。

伝道師①：弦楽器イルカのススメ

知ってたよ、悩んでたの。あたしずっと見てたから。ヒロくんてさ、誤解されやすいんだモン。片時も目が離せなくて。

あんなに一生懸命やってるのに、みんなやっかみでひどいこと言うよね。受賞自体かなりアレな上に一年以上経っても次回作なしとか、そのくせなぜか携帯ゲームのCMに似合わない金髪で登場とか、そういう誹謗中傷する人が逆におかしいよ。俳優として一流ってだけじゃなく、クリエイターとしても現世を超越してる、しかもあんな病気持ちで足手まといな絢香の面倒まで見て、完璧すぎる男性だからみんな嫉妬してるんだよ。ヒロくんはもう無理しないで、文学者なんだから絢香の収入でヒモになるくらいがちょうど、むしろ勲章だよ！絢香なんてげっそりやつれるまで働かせばいいのよ、あの泥棒猫が！

あ、ごめん、ちょっと高ぶっちゃった。これいつもの心の病いだから気にしないで。お薬飲んだら治るから。

それよりサッカー日本代表の長谷部キャプテンとの対談、お互いにこれからの日本を牽引しようって激励し合ってたアレ、すっごくカッコよかった。やっぱりこれからの日本文学界、いえ、日本文化そのものを引っ張るのはヒロくんしかいないって、あたし確信。遂にan'anの国定重要文化財に指定したい男性NO. 1決定だね！文化勲章を与えたい男性と二冠達成間近かな？いやもうそんなじゃチープすぎて逆に恥辱だね。あたしがあれするああいう人ならヒロくんもうち側の人間だよ。文化勲章あげる側の人間であらせられる感じの御方だよ。

おっとイケナイ、ついつい感情移入しすぎて企画の趣旨から脱線しちゃった。ちゃんとヒロくんの悩みを最後まで解決してあげなくちゃ。めんごめんご。

というわけで、庶民どもがもう一度ヒロくんの足元にひれ伏し崇め奉る本来の立場に戻りたいって悩みだよ。もう今みたいなペテン師扱いや失笑、蔑視や罵倒、唾吐きや村八分の対象に甘んじることに我慢ならないんだよね。うん、大丈夫わかってる。あたしが見事解決してしんぜよう、お任せアレ！

まず見た目から変えよう！ゴッホも死んでからって言われるくらいだから、ヒロくんなら三千年後くらいにやっと時

代が追いつく感じ？ だからもっと庶民どもの目に留まるようにさ、全裸に花いこう。しかもホラ音に反応するあの昔流行った、フラワーロックだっけ？ ヒロくんのありがたいお話をいつだって頷きながら聞いてくれるアレを陰部に飾ろうよ。それで週刊誌に『水嶋ガガ、御乱心?!』って取り上げられるまでやろう、それ。ヒロくんに一番似合う場所はそこだから。あたしわかってる。

あ、今思いついた。ついでに黄色い紙とか財布の中入れとこ。っばいから。そういうの開運っばいって今、単なる思いつきだけどとりあえずやってみよ。何事もまず形から。

でも形だけじゃダメだよヒロくん、先走らないで。右往左往するのいつもの悪い癖だゾ！ 内面も変えなくちゃ。内面を変えるためにまず出家しなくちゃ。ストイックなヒロくんのイメージ貫いて剃ろうよ頭髪を。でも頭髪だけじゃストイック感足りないかな。やっぱヒロくんも物足りないよね、もっとギリギリだモンねいつものヒロくんは。

あ、去勢するか。チンコ取っちゃお。中性的な美青年から本当の本物へ、大人の階段駆け昇ろうよ。オカマじゃないのに去勢した世界初の中性作家として、それとは別に関係ないミステリー風コメディ小説でベストセラー目指そうよ。

ま、現状考えるベスト・アドバイスはこれくらいかな。今の腐ったミカンみたいな状況からこれで間違いなく脱出できるよ。頑張って！ 御礼は出世払いだからね！ バイちゃお！

今月のアドバイス・まとめ

チンコ 切って 出直せ！

伝道者②：オパーリンのススめ

悩める斉藤智裕氏へ。頼まれてもおらんが、貴方の悩みを解決することになったので、読んだよ。貴方の処女作『K A G E R O U』、もちろんブックオフにて100円で買った。茨城県の田舎のブックオフで買ったのだが、そんな田舎でも、貴方の処女作は100円コーナーに5冊も6冊も置かれていて、通常のコーナーには一冊もなかった。

同時に根本敬の『因果鉄道の旅』を買ってしまったために、そちらばかり先に読み進み、『K A G E R O U』は中々読み始めることができなかったのだけれど、いざ読み始めると、スルスルリとものの2、3時間で読み終えることができた。

まず感想を述べる、それが作家への礼儀でもあろうからね。実のところ読む前は、貴方およびにその小説に対してかなりネガティブな思いを持っていた。けれど、読み終わって第一に感じた印象としては「なかなか面白い」というものであった。素直にそう思ったよ、もちろん数多くの改善点もあるのだけれど。

もう少し詳しく書く。まず、小説のアイデアというか話のネタは面白かった。あのレベルのネタを量産できるんなら、貴方は今後も十分作家としてやっていけるんじゃないかと思う。次に文章の質、初めて書いてあんなもんなら上出来でしょう。軽い、って感じはするけど、重複したり、まどろっこしかったりというのは感じなかったの、スラスラと読めて読みやすかった。今後、貴方がどういう方向に進みたいのかにもよるけれども、まあ、悪くはないと思うよ。

はい、誉めはここまで、ここからは改善点について。まずね、話を急いで進め過ぎちゃった感があるね。所々、描写の不足を感じる。何もそれは文字数を増やせて言いたいんじゃないで、行間で語るといって、何と、難しいけどさ、描写に厚みが足りないと思うよ。

例えばヒロイン。あっさりし過ぎだね。「魅力的」なのは分かるんだけど、「どう」魅力的なのか、がすっ飛ばされちゃってる。あれじゃ、「ただ不幸で美しいだけのヒロイン」という凡庸な「キャラ」で終わっちゃっている。もっと、具体的な描写を加えて「人物」にすべく肉付けしていった方がいい。例えば、そのヒロインは「指の爪を噛む癖があって、爪の形がギザギザな上に、もうほとんど爪は残っていなかった」とかさ。一つ「イビツさ」を付け加えれば、他がより際立つ。小説は映画じゃないから、「美しい」と言っただけじゃ何も伝わらんのだよ。具体を積み重ね、行間で語らんと。と、偉そうに書いてるけど、俺もそれができている訳ではないだろうから、貴方もこれから頑張りなさいという話ね。

で、これまた話の「すっ飛ばし」への叱責なんだけど、ヒロインと主人公が恋するに至る過程、すっ飛ばしすぎ。恋に至る「きっかけ」の「仕掛け」はすごく良かったと思うんだよ。それだけにその後のスカスカ具合が余計気になる。小説の構造的に「一瞬一瞬」「ひととき」がすごく大事になってくる恋なんだから、そこにもっと描写を、時間を注がなきゃ。なんかね、小説全体を通しての感情の起伏というか、感情の濃度が均一で、ムラが無さ過ぎるんだな。もっと、

小説内の時空間を自在に操って、ヒロインとの大切な「ひととき」をこそ極大に引き延ばす様にして書かなきゃ。

「へえ」で終わっちゃうよ。

あと、最後にね、あの連発されるダジャレ、いらないと思うよ。単純に「異物」にしか感じられない。

とまあ、以上が僕の感想なんだが、あれだよ。貴方の悩みを解決してあげなきゃならないんだよね。分かった、やってみよう。

貴方の悩みは2つあるとみた。「読んでもないのに僕の小説の悪口を言う奴が多い」と「次の小説が書けない」だろ。それぞれに解決策を提示していこう。

まず、「読まず嫌い」対策。これはねえ、まず全員に好かれる事は不可能だと認識する必要がある。で、貴方の小説を好きな人がたった一人であっても、その人のために小説を書き続ける覚悟はあるのか、と言うことになってくると思うよ。ないなら、タレントに戻りなさいな。中途半端が一番見苦しいぜよ。ちなみに、その「一人」って言うのは「貴方自身」の事だからね。

次、「次作が書けない」について。たぶん貴方は「良いものを書こう」とし過ぎだよ。作家って言ったって、ピンからキリまでいる訳だしさ。今からドストエフスキーになりたいっていうのはちょっとキツイかもしれないけどさ。貴方の敬愛している辻〇成だっけか、あれぐらいだったらね、まあね、うん。現時点で俺はもう目指す人変えた方がいいんじゃない、って思うよ。

つまりさ、何が言いたいかっていうとさ、肩肘張らず、もったいぶらず、地道に書けってことさ。以上。

今月のアドバイス・まとめ

チンコ 切って 出直せ！

時は2011年11月18日、早朝。財布をなくし、一期一会の人達の親切に「乞食がごとく」すがりまくったあの日から早くも1週間が経った。僕は池袋でバスを待っていた、手には「東京ばなな」を3つぶら下げて。恩人たちに恩返しに行くのである。

千曲バス、池袋発上田行き、始発、に乗り込み、数時間（3、4時間だった気がする）。昼頃に上田駅に着き、しなの鉄道に乗り換え、田中駅。以後徒歩で東御市役所付近のガソスタへ。

恩人③、ガソスタの店長と再会し、丁寧に礼を述べ、東京ばななを渡し、預かってもらっていた原付を引き取る。事務所にてしばし歓談。「俺の若い頃はな」と前回と同じ話を聞く。ガソリンを満タンに入れ、何度も何度も礼を言い、それでも感謝の気持ちは言い尽せない程。後ろ髪をひかれつつも「また来ます！」と次の恩返しへ。

恩人①、当直のおじいさん。東御市役所に行くも、当直のおじいさんはその日は当番ではなかったらしく、受付には別の人が。仕方なく、彼の自宅に電話をし（ガソスタの店長に聞いておいた）、丁寧に礼を言った後、受付の人に「渡しておいてください」と東京ばななをおいて、次の恩返しへ。

恩人④、観光案内所のおばさん。再び上田駅に向かい、観光案内所へ。が、受付にいたのは別のお姉さんっぽい恰好をしたおばさんだったので「〇〇さんはいらっしゃいますか」と聞くと「午後3時までいません」との事。上田城に行って時間をつぶす。それでも時間が余ったので、駅構内の「おぎのや」で天ぷらそばを食べる（釜飯は高いので）。やっと、午後3時。無事、恩人④に会い、借りたお金を返し、土下座せんばかりの勢いでお礼を言い、利子を払う代わりに東京ばななを手渡し、恩返し完了。

全ての恩人達に恩を返し終わったので、帰宅。と、ここまで書いていなかったが、その日は土砂降りの雨であった。僕の乗り物は「武ちゃん（原付）」である。その後10時間強、雨が止むことはなかった。本当は、その時僕がどれほど辛かったか、寒かったか、詳細に書きたいところだが、何故か、その時の記憶だけが僕の頭の中から綺麗さっぱり抜け落ちている。雨の中、武ちゃんに跨り上田駅を発った所までは憶えている。が、その次の記憶は、翌日の夜中にパンツ一枚で布団にくるまって目覚めた時のものである。二階の部屋から降りて、外に置いてある武ちゃんを確認すると、チェーンカバーが無くなっていた。

以上、一連の原付一人旅の模様を書き記したが、この旅を通じて僕は何を得たのだろうか。上手く言い表せないが、失ったものは明確である、なけなしの金、武ちゃんのチェーンカバー、一人旅への幻想、である。得たものは、何なんだろう。分かった事ではあるが、世の中にはどこぞの馬の骨とも分からない人間に何の見返りも期待せず親切にしてくれる物好き、ではなくて素晴らしい人達が沢山、かどうかは分からないが何人かはいる、という事である。かといって、初めからそれをあてにして無茶をしていいという事では、決してない。そんな事したら罰が当たって痛い目を見る事は必死である。そもそもの話、僕が財布を無くしたにも関わらず、幾人もの親切な人に助けられたのは、一重に僕の純真無垢な心、その結果としての日々の行いの賜物である。並大抵の人が僕と同じ境遇に陥ったとしても、野垂れ死ぬのが落ちである。決して真似してはいけない。

結論、日本海は遠い。もう二度と原付で旅などしない。

1、「つまらない話」

僕は今、新聞記事を切り抜いている。就職を控え、新聞社を受験しようと考えているから、そのためのお勉強をしているのだ。しかし、新聞は毎日毎日届けられ、休むことを知らない。一方で記事切り抜き人である僕の方は休んでばかり居る。一ヶ月分ほど溜まってしまった新聞紙の山が、散らかった部屋の真ん中に積み上がっている。その固まりが「早く読め」「お前はサボっている」と僕を威圧する。

世の中で起こった出来事の山の威圧に、僕は少しウンザリしながらも、僕は「気になった」記事を、「重要な」記事を切り抜いていく。気になった記事、重要な記事。社会保障、格差、北朝鮮、原発、等々。果たして、それらの出来事が僕にとってどれほど「気になる」事なのか、どれほど「重要な」事なのか、それは考えないようにしている。実際のところ、それらは僕個人にとって、大して「気になる」ことでもなく、「重要な」ことでもないからだ。おそらく、街を歩く見ず知らずの可愛い女の子の短いスカートの中身の方が、僕にとってはよっぽど「気になり」「重要な」懸案である。

つまり、僕には新聞記者という仕事は向いていないのだろう。記事を切り抜きながら、僕はそのことに気づいてしまっている。が、特に他に向いている仕事がある訳でもないので、僕は黙って切り抜きを続けている、深夜三時。

向いている、向いていないという問題の前に、僕はあまり働きたくないのだと思う。リクナビやマイナビに並んでいる様々な会社の紹介を見ても、ちっとも「働きたい」と思わないのだ。どの会社の紹介も、自分の会社について美辞麗句を並べ立て、「うちは素晴らしい会社です」と謳っている。「我が社にはどこよりも「成長」できるフィールドがあります」とかさ。僕は「成長」したいとは思わないので結構です。会社の方も「あなたの様な方は結構です」というだろうが。利害一致である。

しかし、そんなことを言っても、働かなければ飯が食えず死んでしまう。「俺は働かないという信念を貫いて死んでやる」というほど肝が据わっているわけでもないのに、何かしらをして働かなければならぬ。どうせ働かなければならぬのなら、できる限り嫌じゃない仕事がしたいと思うのは人情であろう。幸い僕は文字を書くことはそれほど嫌いではない。むしろ、なかなか好きな好意である。というわけで、僕は新聞記者を志す事になったのである。かれこれ半年ほど前の事である。

それからというもの、僕は新聞を取り、毎日とはいかないまでも読むようになった。当然の事ながらその結果として、多少は世の中で起こっている出来事について把握するようになった。ここで問題が生じた。僕が世の中の出来事について知ったところで、どうにもなりやしないのである。世の中は知らぬ顔をして僕に出来事を届ける、が僕の方は世の中に何も届けない。完全なる一方通行なのである。コミュニケーションが成立していないのである。このことが、僕が切り抜きをつまらなく感じる理由の最たる所である。「やりがい」というものが全く感じられないのである。

そしてそれとは別にもう一つ、僕が新聞記者を志すにあたって大きな問題がある。それは現在の僕の身分である。現在僕は生物学を専攻する大学院修士課程の学生である。つまりは畑違いなのである。そして、この「畑違い」という要素は、僕が新聞記者を志すにあたって、不利に働くことはあっても決して有利に働くことはないであろう。畜生め、初めから新聞社を目指すとは分かっていたならばメディア論でも選考しときゃ良かったものを。と悔やんでみても後の祭り。仕方があるまい。

と、ここまで書いてきた通り、現在の僕を取り巻く状況はあまりよろしくない。しかし、世間一般で「ブラック」と呼ばれているような会社に就職し、死ぬまで社畜として虐待されるような事になってしまえば、もっとよろしくないのだ、あまり贅沢を言うてはいられない。身の丈にあった落とし所を探す。これが僕が今までの23年間の人生で学び取った教訓である。

さて、ここまでは現在僕が置かれている現状について書いてきて、早くも書き終わってしまった。書いてみるとあつけないものである。しかし、この現状、あまりに夢がない。つまり、全然面白くない。書いている自分が面白くないのだから、読んでいる貴方がもっと面白くないと感じるのは当然であろう。別に、貴方達つまらない思いをしよう、いっこうに構わない。読むのをやめればいい、ただそれだけのことなのだから。

問題なのは、書いている僕がつまらないということである。せっかく切り抜きという僕の将来にとっては非常に大切な作業を中断して書いているのだから、せめて僕ぐらいは楽しい思いをしなければ割に合わない。まあ、退屈極まりない切り抜きをしなくて済んでいるというだけで、十分に書いている価値はあるのだけれども。そこは、あれだ。僕は快樂主義者である。どうせのことならば、脳味噌から汁が出る位の快樂を味わいたい。

というわけで、ここからは書いている僕が「気持ちのいい話」を書いていくことにする。しかし、一つ注意していただきたいのは、僕の快樂と貴方の快樂が必ずしも一致するわけではないということである。いや、一致することなどほとんど無いのかもしれない。なに、さりとて大した問題ではあるまい。読んでいてつまらなければ、即座に読むことをやめてしまえばいいだけの話である。僕には好きに書く自由があり、貴方にはやめる自由がある。まったくもって結構な関係ではないか。

本来ならば早く「気持ちのいい話」を書き始めたいのだが、今「好きに書く自由」という言葉が出てきたので、つまらないついでにもう少しつまらない事を書こうと思う。

僕にとって新聞記者があまり魅力的に感じられないもう一つの理由がこの「好きに書く自由」と関係している。これはいくつかの新聞社の会社説明会とやらに参加して分かったことなのだが、どうやら新聞記事は好きに書いてはいけないらしいのだ。その理由について記者達は「社会の公器としての責任」だとか何とか言っていたのだが、僕にはどうてい理解に苦しむ理由だったので忘れた。要するに真実かつ公正中立でなければならず、その上で読者が、つまりは貴方が「あー、役に立ったなあ」と感じるようなものを書かなければならないのだそうだ。まったくもってけしからん。

以下、けしからんと感じる所以について書く。まず、真実、公正中立。これは全知全能の神以外には不可能。オナニーを覚えたばかりのガキでも分かることでしょうが。そう思って僕は記者にその旨を「質問」してやった「無理だろう、普通に考えて」と。そしたら「確かに無理ですが、それを目指して常に自問自答することが記者の使命です。」と答えた。なら初めからそう言えよ、と思った。無理だと分かっているくせにその無理なことを大義名分として掲げてしまっている時点で、もう「嘘」ついてんじゃないか。そういう人は「真実」なんて目指す資格無いだろ。

次、読者の満足。これはさっきの「真実、公正中立」と関係してくるのだが、読者といっても色々いると思うんだわ。分かりやすくするために具体例でも挙げるか。例えばねえ、天下りでいいか。仮に国家公務員の天下りを暴いて批判したとする。すると、国家公務員じゃない人、つまり国民は「ふざんな」とか「役人め、死にさらせ」とか思って、まあ概ね「役に立った」と感じるだろう。ところが、だ。バラされてしまった国家公務員はその記事についてどう思うだろう。きっと「余計なことしやがって」とか「家のローンが残ってんだよ」とか思って、決して「役に立った」とは感じないだろう。つまり、みんなの「満足」なんて土台不可能なのだよ。

また、この記事を書いてしまった時点で、その記者は「国民」の味方をし「国家公務員」の敵になっている。はい、「公正中立」はどこにいったんだろうか。そう聞いたら記者はきっと「私は正義に基づいて書いたのだから、公正中立である」とか何とか、それらしいことを答えるだろう。しかしだね、記者よ。万人にとっての「正義」なんてものを誰が決められるんだろうか。無理だよ。じゃあ、百歩譲って「大多数の承認を受けた正義」があったとする。で、記者君はそれに基づいて書いたとする。でも、それって、その「大多数」から漏れた人からしてみれば正義でも何でもないのでしょ。ただの弱いもの虐めと何が違うんだろうか。

と、長々とあら探しのようなことをしてしまったが、要するに僕は「好き勝手に書くこと」以外の書くことは好きではないし、「真実、公正中立」に書くことについてもそれによって「万人の満足」をゲットする事についても、責任は持たないのである。

「じゃあ、記者目指すな」という事になってしまうのだけれど、それについてはこの（今までのところつまらない）文章の序盤に「それ以外ももっとつまらない」という消去法で志望せざるをへない旨のことを書いているので、気になった人はそこを読み直してほしい。

つづく

小説（読み切り）『存在と記憶の距離感（上）』 オパーリン

書き始めたはいいものの、その上ラスト手前まで書いておきながら、長らく完結させずに放っておいてしまっていた小説がある。『存在と記憶の距離感』という題である。僕自身「あれはもう完結しないのかもなあ」なんて思っていた。ところが、この月オパに向けた記事を書いているうちに、創作意欲がムクムクと湧きあがってきて、なんとラストまで書きあげてしまった。

せっかくなので、この様に「特別掲載」としてページを割き、全文掲載することにした。なお、ラスト以外の部分は僕のパプーのページで連載していたので、1～6話として既に読むことができる。本誌掲載にあたり、章だてを付け加えるなど、一部改定した。つまり、完成版はこっちである。近日中にパプーの掲載分も改定し、本誌掲載と同等の電子書籍にする予定である。

では、『存在と記憶の距離感』をお楽しみください。

・『存在と記憶の距離感』

執筆者 オパーリン

1、「思い出す」

空は黒い雲に覆われて、どんよりと湿っぽい。あたりの空気も密度を増して重たい感じがするし、今にも雨が降り出しそうだ。そんな陰鬱な時は、静けさも「静寂」ではなくて「無音」という様な、「あー、またか。また雨かよ。」という意味合いに変わってくる

ポツリ。ポツリ。

雨は降りだして、点々とアスファルトの色を濃くしていく。そして、一度降り出した雨は、囷に乗って次から次へと。これは本降りだ。地面の色はすでに塗り替えられてしまって、落ちた水滴は飛沫をあげて跳ね返っている。

けども、外は雨が降っているけれども、僕にはそんな事は関係ない。部屋にいてベッドでゴロ寝しているのだもの。濡れないもの。

雨の日は外に出ない事にしている。靴の中に雨が入ってきて、靴下がじっとりと濡れてしまうのが気持ち悪くて嫌いだ。それに雨だというだけで、もう何かをしようという気力が湧いてこない。だから今、僕は家のベッドでゴロンと寝っ転がって、じっとして、何もしていないんだ。

ただぼんやりと天井を眺めている。天井のは板張りで、その木目をじっと眺めて迷路に見立てて遊んでるんだ。でも実際のところ、木目は木目以外の何物でもないのであって、だから当然迷路ではなく、迷路遊びをするには向いていない。そもそも、どこが入り口で、どこが出口かも分からない。だから仕方なく、目に付いた適当なところから始める。つまり、この木目迷路をしている誰かさん（僕はそれを上から見ている視点だ）は気がつくと言の分からない迷路の中に「いた」ということになる。なんだか可哀想だけれども仕方がない。

誰かさんは訳も分からぬまま、途方に暮れる。でも、うろうろと歩き出す。ただ、見ている僕でさえも出口がどこにあるのか分からないのだから、そもそも、迷路ではなく木目だから、彼にとってはなおのこと理解に苦しむところだろう。

僕は木目迷路に飽きて、寝返って横を向いて部屋を眺める。木目にいた彼はもう二度と出れないだろう。僕が作り出した想像なのに、僕の視線から見放されてしまって。彼はこの後一生涯木目の中をさまよい歩くことになるだろう。可哀想に。僕の気まぐれで産み出されてしまったがゆえにそんな目に逢わなければならないなんて。

横向きの部屋、床も天井も壁になって見える。僕も床の方の壁に張り付いたベッドに張り付いている事になる。ソファも本棚も壁から生えている。そのままずっと横向きの世界を眺めていると、本当に上下の間隔がおかしくなってきた、本来どっちが上でどっちが横だったのか分からなくなってくる。そうすると、その錯覚に体が侵されてきて、重力の間隔も曖昧になってくる。そして身体がぐるりぐるりと廻り出して、何だか落ちこちそうになる。

小さいころおばあちゃんに連れられて浅草の花屋敷に行った。そこにたしか「ビックリハウス」という名のアトラクションがあった。それにはは、固定された椅子があって客はそこに座る。すると部屋が廻り出す。自分はちっとも廻ってないのだけれども壁や天井がグルグル回るもんだから、すっかり自分が廻っている気になって、落ちこちそうになる。僕は

それが怖くて怖くて、必死でおばあちゃんにしがみついていた記憶がある。

そう、それで、今回はただ横を向いていただけなのに世界がグルグル回りだして、ビックリハウスの事を思い出したのだ。

気持ち悪くなったので、また寝返りを打って仰向けになる。と、また天井の木目が目に入った。でももう、さっきの迷路をうろついていた誰かさんはどこにも見当たらなかった。

ビックリハウスかおばあちゃんかどちらが原因かは分からないが、一つ昔の事を思い出したら次々に過去の記憶が浮かび上がってきた。でもそれらはひと繋がりのお話という感じではなくって、一枚一枚写真をめくっていくような、そんな浮かびあがり方だった。中には色がついていたりいなかったり、その記憶の中の誰かがしゃべっているものまであった。でもそれぞれ一つずつは短く淡く、すぐに次の光景に移っていった。

とりとめもなく昔の事を思い出すのは、僕にとっては別に珍しい事じゃなくて、眠る前だったり、今日のように暇でぼんやりとしている時によくすることだ。そして、比較的好きなことだ。

その新旧に関わらず僕の記憶はあいまいで断片的だ。いつの事だったか正確には思い出せない事も多い。そんな時、少し哀しい。そしてその哀しいのが切なくて、少し嬉しかったりする。まったくもって自己愛的だなあ、と自分でも思うのだが、行きつくあてのない感傷はたまらなく心地よく、僕は中毒している。

「ああ、こうやって思い出懐かしみながら、気づけば死んでしまっていたのならなあ。それがいいなあ。」
そんな風に思いながら浸るのが好きなのだ。

と、記憶のスナップ写真の中に一人の女の子が現れた。真直ぐで艶のある黒々とした髪、異様と言える程に大きな瞳、僕の頭の中に浮かんだその子はそんな印象が強調されている。そしてそのこぼれそうに大きな瞳で、その子は僕を見つめている。じっと、ずっと。

気になって、僕は記憶の自動再生をやめて、その子の事を思い出してみる事にした。

その女の子は蘭という名前だった。蘭と出会った時、僕は十六歳で蘭は一つ年下の十五歳だった。今僕は二十二歳だから、六年前の事になる訳か。六年、僕があとどれくらい生きる事になるのか分からないけれども、長い人生からすれば六年なんてあっという間なのかもしれない。振り返って思い出す程の長い年月ではないのかもしれない。でも、僕の今までの二十二年からすれば、六年というのはその三分の一か四分の一位を占めている訳だし、僕からすればそれなりに「大層な」昔の事のように感じられるんだ。

だから、十六歳の時の僕が一体どんな気持ちでいて、どんな事を考えて暮らしていたのか、精確には思い出せない。今、蘭という女の子と僕との関係について思い出そうとしている訳だけれども、その時の僕は何だか他人の様に思える。「ひと繋がり自分」というよりは、やっぱりどこか「僕の頭の中にいる少年」という感じがして、何とも言えない距離感を感じる。そして、その僕の中の少年が十六歳の当時に思っていた「正義」だの「恋」だのというのは、彼自身はしごく真剣にそう思っていたのだろうけれど、それを思い出している僕からすると、その真剣さがどこかおかしなものに感じられてしまう。

何だかうまく伝えられないけれどもとにかく、十六歳の時の僕を思い出そうとすると「懐かしさ」というよりも「距離感」の方が先行してしまうという事なんだ。それでも、今回に限らず僕は、十六歳の時の自分の事、そして僕と出会い関係した蘭という女の子の事をよく思い出す。そしてその度に心のどこかにに引っかかる様な感覚を覚える。もう終わってしまった事、僕の「今」とは二度と関わりを持たないであろう過ぎ去った過去が、今でも僕にそんな感覚を与え続けているというのはとても不思議な気持ちなんだ。

この刺を残した思い出が、その刺によって忘却を免れ、未だに僕の中にとどまり続けている、色あせて「距離感」を感じるようになった今でも。その「刺」とは一体何だったのか、正直なところ僕は答えを出しかねている。だからこそその問い自体が刺として僕の中に引っかかっているのかもしれない。

ただ、あともうしばらくすると、それがいつなのか、五年後か十年後かそれよりもっと先の事なのか僕には分からないけれど、その刺が何だったのかという問いの答えを僕はもう二度と見つけ出す事が出来なくなってしまうだろうと思う。そんな気がしてならないんだ。だからこそ今、既に色あせて「距離感」を伴うようになってしまったこの思い出を、一つ

一つ丁寧に紐解いていきたいと思うんだ。

2、「記憶1、真希」

さて、だらだらと前書きが長くなってしまったけれど、いよいよ僕と蘭の事について話していきたいと思う。ただ、どうしてこんな風に（距離感やら刺やら）前置きが長くなったかといえばそれにはちゃんとした理由があるんだ。つまり、僕と蘭について話そうと思った時に、そもそもの話の始まり、僕と蘭とがどうやって出会ったのか、それ自体がひどく複雑で、あまりに現実離れしていて、にわかに自分の記憶というものを疑ってしまったという訳なんだ。

「僕はこんな風に記憶しているけれど、それはそもそも本当なのか？」
という具合に。で、距離感やらなんやらの話になってしまったって訳なのさ。しかしまあ、今となっては自分の記憶以外に頼るものは無いのだから、思い出したそのままそのまますくしかないのである。

いい加減に始めよう。

僕と蘭が出会ったのは、真希が僕等と遊ぶ時に彼女を連れてきたのが最初だった。って言っても、これには大分説明が必要だろうな。

えーっとまずは「僕等」について。その当時、僕は中高一貫の私立男子校に通っていて、中学二年の頃から太一と正平の三人でつるんでたんだ。まあ、悪友って奴達だったな。人のいない駐車場で隠れてタバコを吸ったり、カラオケで酒盛りしたりさ。その時は僕らもご多分に漏れず思春期で、反抗期だったからさ。とにかくもう、何が何だか訳が分からなくて、無性に苛々して、誰かれ構わず逆らいたかった。かと思えば、夜中に無性に悲しくなって泣き出しちゃったりしてさ。情緒不安定を地で行ってた訳さ。

太一はひよろっと背が高く、物静かな奴だったな。まあ、僕等とはよく喋ったけど。よく本を読んでる奴で、物知りだった。で、僕なんかは直情的な反抗児って感じだったけど、太一はそれと較べるとどこか冷めていて、ニヒルって感じだったな。そのニヒルな感じがその時の僕にはとてもカッコよく感じられて、いつも太一の後ろをひっついて回ってた。そんな僕に対して、太一は表向きは「なんだよ、ウゼエな。」みたいな感じなんだけど、実は内面熱い奴なんだ。よく彼の家に遊びに行ったら、二人で（今聞いたら恥ずかしくて笑っちゃうような）人生の話について、あーだこーだよく議論してた。その頃の僕にとってそんな彼との関係はとても尊いもので、たった一人の「友達」だ、って思ってたな。とまあ、太一はこんな奴だよ。

で、正平。こいつはまあ、どうでもいいっちゃどうでもいいんだけど、だた話の流れ上後々の真希の事に繋がってくるから、一応。正平はねえ、一言でいえば顔が良かった。女うけのいい顔だったな。ただ、僕等が出会った頃はまだ中学二年で男子校だった事もあって、三人ともまだ童貞だったし、その、女にモテるとか何とかはあんまり関係なかったんだよね。まあそれが色気付くにつれて変わって行って、その後正平とはあんまり関わり合わなくなっちゃったけどね。イケメンって以外に正平がどんな奴だったかって言われると、うーん、普通の良い奴だったよ。太一とかとは違って、人生についての喧々譁々の議論なんてのもこれっぽっちもなかったしな。ただまあ、普通につるむ分には何の問題もないから、中学二年、三年の時にはよく一緒にいたんだよね。そんな感じ。

そしてその当時、僕等は十五歳の少年としてしごく月並みに悶々としていた。まさにチンチンの奴隷といえる状態だった。寝ても覚めても頭に浮かぶのは女の子の裸ばかり。僕のチンチンはあまりに元気で、少なくとも一日に3、4回はしごいてやらないとまともに日常生活を営む事が出来なかった。

ただ、有り余る旺盛な性欲を持て余していた僕らではあったけれども、その性欲が向かう矛先は実態が無く、ひどく観念的な情念であった様な気がする。早い話、男子校だった事もあって、僕等の身の回りには女の子なんていなかったから、誰かを好きになるという事が無かったのだ。だから、僕等の本能としての性欲は具体的な対象に向けて発散される事が無く、唯唯、自分達の体内脳内を循環して増幅されていく一方だったのだ。今から思えば、毎日毎日無性に苛々していたのも、訳もなく恐ろしさを感じたりしていたのも、大部分はこの行き場のない性欲のせいだったのかもしれない。

そんな妄想性欲地獄に喘いでいた僕に、ある日突然に「具体」というものが提示された。その「具体」を持ってきたのがイケメンの正平だった。問題に直面した時、それを解決すべく行動を起こせる奴ってというのは、脳みそでウジウジ考え

ている奴なんかじゃなくて、特に何も考えない奴なんだな、ってこの時しみじみと思ったっけ。

具体的に話せば、その日、授業が終わって、いつもの通りなんとなく三人で集まって、校門を出た。そしてこれもいつもの通りにくっちゃべりながらブランブランと高田馬場駅に向かって歩いてた。僕等の学校は新大久保にあったから、その界隈を寄り道しながら帰るっていうのがお決まりのコースだったのね。校門を一步出た途端に何だか呼吸が楽になって、抑圧されていた自分が解放されたような気分になった。で、学ランの第一ボタンを外す。規律の大好きな学校だったから、学校の敷地内でボタン外していると先生に引っ叩かれるのね。

高田馬場駅への途中、学習院女子の制服を着た女の子達と頻繁に行き違う。その度に「真中がいい。」「いや、左だ。」なんていう風に三人で批評する。そんな僕達には目もくれず、楽しそうにお喋りしながら通り過ぎていく女の子達、眩しい。

「あーあ、あんな女の子達と一緒に遊んだりしたいな。」

僕は口癖になっている決まり文句を、飽きもせず繰り返す。と、二人ともいつもはここで「そーだなあ。」とため息交じりに返答してくれるのだが、どうも今日は様子が違う。太一はパイとそっぽを向いているし、正平はニヤニヤとこっちを見ている。俄然興味の湧いてきた僕が、

「どーしたん、なんかあったん？」

と聞くと、正平は

「いや、別に何も無いけどさ。たださ、あれだよ・・・。」

なんてもったいつけながらも、その実話したくて仕方が無いらしい。

マックに寄って正平から聞き出した話を要約すると、先日女の子と二人で遊んできた、という事になる。その女の子は僕等と同じ歳で、名を真希というらしい。そして、僕の最大の関心事だったのが、どうやってその真希ちゃんとやらと出会ったのか、という事である。その

きっかけについても、正平は隠すことなくペラペラと話してくれた。しかし、そのきっかけというのが当時の僕等からすれば、いや、今振り返ってみても、あまりに現実からかけ離れた様に思えるものだった。

「いやさ、出会い系サイトをやってみたらさ、実際女の子からメールが送られてきてさ。俺、恐くなっちゃってさ、「実は俺十五歳なんだ」って返信したんだよ。したらさ、「えー、私も十五歳だよ。実は私、サクラやってるんだあ」ってメールが来たんだ。で、一気に仲良くなっちゃって、こないだ会って遊んできたって訳。」

正平はポテトを頬張りながら、愉快そうに説明してくれた。

が、聞かされた側としては何と反応したらいいものやら分りかねた。さっき太一がそっぽを向いたのも、これで納得がいった。太一は事前に正平から同じ話を聞かされていて、彼も僕と同じように返答に詰まってしまったんだろう。人は己の想像の範疇を超えた話をされると、喜怒哀楽の感情が湧きあがる前に啞然とし、次に当惑してしまうものらしい。

当惑の最中に、僕がまず思ったのは「本当か？」という疑いである。けれど、正平は嘘を吐く様な奴じゃないし、その無邪気な話しぶりからも、嘘をついている様には見えない。第一に、真っ先に嘘じゃないかと疑われる様な、そんなしょーもない嘘をついたところで、正平には何の得にもならないのだ。だから、どうやらこの話の内容は本当らしい、と僕は仮に信じることにした。

ただ、信じるとなると、それはそれでちょっとまずいんじゃないかな、と思った。出会い系のサクラをやっている15歳の女の子、一体どんな子なんだろう。想像のしようがない。

「お前それ、ちょっとヤバいんじゃないの？」

正平に聞くと、太一も

「そーだよ、ヤバいよ。」

と賛同する。が当の正平は、

「え、何が？別に普通でしょ。」

と、すっとぼけている。ちっともヤバいとは思っていないらしい。

その時の僕等は、キンキンに尖がってはいたけれど、やっぱりそれは中学生の坊やとして悪ぶっていたという事に過ぎなかった。言ってしまうえば、ごくありふれた反抗的な餓鬼んちゃだったのであって、社会的な規範を踏みにじるとか、犯罪を犯すとか、そういった事とは無縁だったのだ。そんな坊やからすれば、やっぱり出会い系サイトは胡散臭い、いかがわしい以外の何物でもなかったし、その上サクラだなんて言えばそれは犯罪じゃんか、という話である。ヤバい、と思

うのは当然の感覚なのだが、正平にはそんな感覚はみじんも備わっていなかった様なのだ。

「いや、普通じゃないと思うよ。そもそもサクラとか、犯罪じゃん。」

と、至極真っ当なことを言うに至るが、正平は

「じゃあ君達も一緒に遊んでみる？そしたら別にヤバくないって分かると思うよ。」

と、僕等をそのヤバい事に巻き込もうとする気マンマンである。が、そういう風に誘われてしまうと、僕の中にも「恐いもの見たさの好奇心」がムクムクと湧きあがってくる。

「え、マジで？でも・・・、うーんまあ、じゃあ・・・、遊ぶ、かな？」

結局その次の週に、僕と太一は正平に混ざってその女の子と一緒に遊ぶ事になった。そしてこの時にであった女の子が真希であった。

真希はあらゆる意味で、僕等の想像力を遥かに突きぬけて、ぶっ飛んだ女の子だった。どのようにぶっ飛んでいたのか、うまく言い表せそうにないが、これら話す僕等と真希との交友の話を聞いていただければ、分かっていたかと思う。でも、あえて一言で言ってしまうえば、真希は奔放な女の子だった、そう何物からも縛られずに、奔放だった。

先程の流れで、僕等三人は学校帰りに真希と遊ぶ事になった。正平の話では、真希は横浜の方に住んでいて、この日は新大久保駅までわざわざ来てくれるという事になっていた。正平がそう決めたのだが、その話を聞いて、僕がまず思ったのは

「横浜じゃ、新宿あたりまで来るのは遠くないかな？」

という事だった。が、正平にその事を聞くと、

「大丈夫だよ、あいついつも新宿ら辺をぶらついてるって言ってたし。」

との事。すっきりしなかったので、

「でも、学校終わってから来るんじゃ時間かかるんじゃないの？4時に待ち合わせじゃ間に合わない？」

と食い下がってみる。

「あ、それも大丈夫。あいつ、学校行ってないから暇みただし。」

「え、どういう事？」

ビックリである。

「それで、親は何も言わないの？」

「あー、言ってなかったっけ？親と仲悪くて家出してるんだって。」

「マジかよ。」

正平から聞かされる真希に関する情報は、その一つ一つに度肝を抜かれるばかりである。

「え、じゃあ、今どこに住んでるの？」

「えーっと、なんかねえ、両親が離婚してて、今は家出してるから元お父さんの家にいるんだって。」

「ふ、ふーん。そうなんだ。」

もう、何と反応すれば良いのか、まったく分からなくなっている。

そんなこんなを新大久保駅の前で話していると、ポン、と誰かが正平の肩を叩いた。

「お待たせ。」

「お、よう！」

真希、登場である。初めて女の子と会った時、まず気になるのはその容姿だろう。僕もその例外ではなく、まずは正平と話しているその女の子の容姿をチェックした。

まず目につくのは金色の髪の毛、大分手入れしていないらしく、根元から15センチくらいは黒い髪が生えてきている。顔は、可愛くはない、がブスでもない、かといって普通でもない、という何とも言えない感じだ。瞳は大きくて二重なのだけど、パッチリおめめという感じではない、そして、焦点が合っていないというか、どこを見ているのかよく分からない感じなのである。そのせいか、全体に顔から表情というのが読み取れず、何を考えているのか分からない。

背丈は当時165センチだった僕とほぼ同じくらいで、体系はデブとポッチャリの間くらいだろうか。

正平に聞かされた話からは、どんな子なのかというイメージがまったく湧かなかったので、いきなり現物がボンとでてきて、これがそれか、とただそのままを受け止めた、というのが真希の第一印象だった。以外でもガッカリでもなく、ただビックリの初対面だった。

真希と初めて会ったその日、あった後に何をしたのか、まあ遊んだんだろうけれども、具体的に何をしただとか、どんなふうに打ち解けたのかだとか、何も覚えていない。思い出そうとはしてみたんだが、どうにもこうにも、思い出せない。ただ、まあ、仲良くなったんだよ、うん。大人になってお見合いでもするっていうんだったらさ、それは「ご趣味は？」なんて感じに探り探りになるんだろうけどさ、子供は初めて会った子とでもさ10分くらい砂場で一緒に遊んでりゃ自然と仲良くなるじゃん。そんな感じだったんじゃないのかな、その時も。

会う前は正平から聞かされてた非行話にビビってたけど、実際に仲良くなってみると、真希はすごく普通の子で、いい子だったな。そう言っちゃうと、なんか月並みな感じになっちゃって嫌なんだけどさ、自分やそれにまつわる諸々の一つしかないはずのものが、カテゴライズされちゃうみたいでさ。でも、本当にそうだったんだから仕方ないやな。明るくて、すごく素直な子だったな。ただ、その素直っていうのが曲者で、真希はどこまでも無邪気で、感情にありのまま、つまりは奔放な子だった。で、そのありのままが過ぎちゃって、その部分でちょとはみ出しちゃうところがあったんだろうな。

で、真希のその「ありのまま」な部分は僕らとの関係の中でも存分に発揮された。例えば、遊ぶ約束をすると、僕等は学校があるから当然その後遊ぶ事になる。でも、真希は学校に行っていないから、彼女からすれば朝起きてから僕らと会うまでの時間はちょっと長すぎるわけだ。で、授業中に何度も電話がかかってくる事になる。当然電話には出れないから、休み時間にトイレに隠れて電話する事になる（僕らの学校は携帯禁止だったんだな）。こっちが声をひそめて「もしもし」なんて言うと、もう向こうでふくれてるんだな。

「もー、なんで電話出てくれないの？もう3回もかけたのに。」

「ごめん、いや、授業中だったからさ。」

「真希朝からずっとヒマなんだけど。」

「いや、そう言われてもなあ。」

「ねー、授業サボって早く遊ぼうよー。」

「あー、いやさ、そうすると先生に怒られちゃうしさ……。」

「大丈夫だよ。一人くらいいなくなっても分かんないって。」

と、終始こんな感じなんだ。それでも何とかなだめて、やっと授業が終わって3人で校門をくぐるろうとすると、もうその校門の前で待ってるんだ。男子校の校門の前で、金髪でパーカーにミニスカート、ルーズソックスをはいた女の子が気だるそうに突っ立てる、まじめな生徒達はビックリだよな。みんな目を丸くして、ジッと真希の事を見てる。僕等も皆に凝視されてる女の子に声をかけるのはちょっとためらう。でも、ためらってるそばから真希は僕等を発見して、

「あー、やっと来たあ。めっちゃ待ったんだけど。てかさ、みんなめっちゃ見てくんだけど。」

大声で話しかけてくる。僕等は、そりゃ見るだろと思うんだが、本人はそれほど気にする様子でもない。僕等はすっかり気後れしてしまって、

「お、おう。ごめんごめん。」

なんて言いながら、1秒でも早くその場から離れたくて必死だ。

「じゃ、行こうぜ。」

「うん。で、どこ行く？カラオケ？」

僕等の学校はそもそも寄り道禁止、ばれたら自宅謹慎という決まりがあったもんだから、こんな会話を先生に聞かれたら一発アウトだ。肝っ玉を冷やししながら、そそくさと通学路にそっぽだ。

しばらく歩いて、やっと同じ制服を着た学生もいなくなってひと安心、とはいかなくて真希はポッケからタバコを取り出し、火を付けようとしている。

「あわわ。真希、駄目だよ。まだここ路上だよ、せめて駐車場とか探さなきゃ。」

「大丈夫、あたしこの前ポリの前で吸ってたけど何も言われなかったもん。」

「いや、俺達学ラン着てるからさ、バレバレ。」

「あ、そっか。ごめんごめん。」

そして僕等は人のいない駐車場を探して馬場の町を徘徊するのだった。

そんな感じで僕、太一、正平と真希の四人でよく遊んだわけだけけれど、この四人組がいつまでも続く事はなかった。

まず、正平がいなくなった。彼女が出来たとかで、僕等と一緒に遊ぶ時間が無くなったのだ。付き合いが悪くなった正平に対して、真希は

「あいつ、マジで付き合い悪いんだけど。」

とか何かぶうぶうと文句を言っていたけれど、僕も太一も、特に腹が立ったとかそういった感情は湧いてこなかった。

「まあ、そんなもんか」

とか、そんな程度の感じだった。僕は

「こいつは自分に何かをしてくれているから友達だ」

という様な考え方で持って誰かと友達になるわけじゃない。だから、正平が僕等と遊ばなくなったから腹が立つとか、もう友達じゃないとか、そういう気持ちにはならなかった。ただ、それ以降正平とは一緒に遊ぶ事もなくなってしまったし、彼の方でもつるむ連中を変えていったりして、何だか疎遠になってしまった。校内で会っても

「おう。」

と挨拶するだけ。仲が悪くなたわけではないんだけど、自然と距離感が生まれていたし、お互いに何となくよそよそしい感じ。結局、高校を卒業するころまでには、自分の中では過去の人というか、すっかり忘れ去ってしまったな。

次に、太一も仲間から抜けてしまった。ただ、太一の場合は正平と違って、三人で遊ぶ事はなくなったけれど、僕と太一が疎遠になるっていうことはなかったな。真希がいない時には、普通に一緒に帰ったり、飯食ったり、カラオケ行ったり、今までと何も変わらないんだな。ただ、真希と遊ぶ時になると、

「今日は俺、用事あるから。」

とか何とか言って帰っちゃうんだ。今になって考えてみると、面倒くさかったんだろうな。三人で遊ぶって言ったって、特に何をするっていうわけでもなかったし、ただだらだらしてただけだったもん。太一は賢い奴だったから、そういうのは無駄な時間に思えて嫌だったのかもしれないな。

それじゃあ、僕と太一が二人でいる時は何か有意義な事をしていたのかと言われると、決してそんなことはないんだけどね。同じ様にだらだらと無駄話をしているだけだったけどさ。でもさ、なんか、女の子がいると話せない事っていうか、男同士の会話ってあるじゃん。下ネタが話せるとか、そういう事じゃなくてさ。読んだ本とか漫画が面白いとか面白くないとかさ、そういう話って、女の子はあんまり好きじゃないでしょ。それよりはあれが可愛いとか、美味しいとか、芸能界がどうか、下らないっていうと怒られちゃうんだろうけど、そんな話ばかりしたがるじゃない。やっぱり太一もそういうのが嫌だったんだろうな。

そうやって、いつの間にか四人組が二人組になっちゃってたんだけど、僕と真希はその後もしばらく二人で一緒に遊んでた。真希はちょっと退屈そうだったけどね。最初は男三人でハチャメチャな女の子真希のヒマつぶしのお相手をしていて、結局僕だけが彼女から離れずに残ったわけだけど、僕はどうして真希から離れていかなかったんだろう。そう考えてみると、僕自身が当時の自分の置かれていた状況にひどく退屈していたんだと思う。親や先生達の言われるままに一生懸命に勉強して、それが嫌で、反抗してみるんだけどそれも決められた枠の範囲を踏み越えない程度の「プチ」反抗に過ぎなくて、結局はいい子ちゃん、そんな自分にホトホトうんざりしていたんだろうな。だから、あるがまま全部無視してぶっ飛びまくっている真希は、僕にとっては「別世界」そのものを感じられて、惹きつけられていたんだろうな。

じゃあ、真希の方はどうして退屈しながらも僕と遊び続けたんだろう。まあ今となっては、というよりも今となくなっても僕は真希ではないから、そんな事は分からないんだけどさ。ただ、勝手に思いを巡らせるのは僕の自由だからさ、考えちゃうんだな。真希はよく地元の友達の話もしていたし、わざわざ新宿界限まで来て僕に会う必要なんてなかったんじゃないかな、って思うわけさ。

真希は寂しさの塊みたいな子だったのかもしれない。両親の離婚の事、家出の事、援助交際してる事、真希はそういった事を隠さず、というよりは進んで僕に話した。

「あたしさあ、家出する前は母ちゃんとめっちゃ仲悪くてさ、毎日喧嘩してさ、めっちゃ殴られんの。顔面ボコボコにされてさ。母ちゃんが離婚したのはあんたのせいだと言われてさ。で、家出したんだあ。」

「ふーん、そっか。大変だな。」

「学校行くと家に帰されるから、学校も行かないんだ。」

「じゃあ、今、どこに住んでんの？」

「今はね、おいちゃんの家。」

この時僕は「おいちゃん」なる人物が誰なのか分からなかったし、真希に聞く事も出来なかったけれど、今考えてみると、真希の元父親の事なのだろうと思う。

真希は携帯を2つ持っていて、僕は不思議に思ってなぜ2つも持っているのか聞いた事がある。すると真希は「ああ、これね。売りやってるおっさんから買ってもらった。」

あっけらかんと答えた。

「売り？」

言葉の意味が分からずに問い返すと

「売りって援交の事だよ。でもね、やらせたりはしないよ。それは嫌だから。」

そう言っていた。僕はいつも通り

「ふーん。」

そう言って話を終わらせた。

セックスをしない援助交際があるのか、はたしてセックスさせない15歳の小娘に携帯をタダで買ってあげる気前のいいおじさんがいるのか。当時も今も、僕は何とも言えない。何故なら、そんなおじさんはいるはずもない、と分かっているからだ。僕は真希を疑いたくはなかったから、その事について考える事をしなかった。そもそも、重大な事は真希が身体を売っていたのかどうかではなく、セックスしたにせよしなかったにせよ、そういう行為をしなければならない状態にあったという事なのだ。そして、僕の心に引っかかっているのは、そんな真希の話に僕はただ「ふーん。」とだけ言い、一緒に居ただけだったという事なのだ。

15歳の僕は、「そんな事、やめなよ。」と止める事も、叱る事もしなかったし、「僕がいるから大丈夫だよ。」と慰めてあげる事も、真希を黙って抱きすくめる事もしなかった。ただ、「ふーん」と言ったきり黙るしかなかった。今、22歳の僕ならどうするだろう。抱きすくめて、セックスするかもしれない。あの時15歳の僕がそうしていれば、真希は拒まなかっただろうと思う。しかし、当時の僕はそんな時にどうすればいいのかなんて分からなかったし、そんな方法があるなんて思いもしなかった。もちろん、セックスという言葉は知っていたけれど、それが自分の身に起こりうる事だなんて、思いもしていなかった。自分とは何の関係もない、別世界の出来事だと思っていた。だから、ただ黙って、心痛めている事しか出来なかった。

さっき、今の僕ならやっちゃうかもしれない、なんて恰好つけて言ってみたけれど、実際はたぶん、あの頃と何にも変わらずに黙りこくってしまうんじゃないかと思う。そんな時にひょいと簡単にやっちゃうのは下衆な行為だ、って思う気持ちどこかにある。かといって、気安く慰めるのはもっと嫌だし、わかったふりして叱るのなんて鳥肌ものだ。今後、年食ってからも黙りっぱなしだとそれはそれで問題なのだろうけども、それでも暫くは、このまま黙るしか出来ない男でもいいんじゃないかと思う。

真希は寂しさの塊のような子だったと書いた。そうだったから、ただ黙って話を聞いてくれて、自分に都合の悪い事を言いそうもない、見方でいてくれる僕と一緒に居たんだろう。ただ、ここで言っておきたいのは、真希は決して弱い人間なんかじゃなかったという事だ。僕にそういう話をする時でも真希は一度として泣いた事はなかった。なんでもない事のように、いつもの調子で話した。

僕はすぐ泣く女が嫌いだ。泣く事を手段として使って、聴衆に訴えかけ、媚びる女が嫌いだ。嘘臭い、というよりは嘔吐きだし、汚らわしいと思う。その点真希はありのまま、潔く、演じる事をしなかったし、僕は彼女のそういう所を魅力的に感じていた。

そんな真希が涙を流しているのを、一度だけ見た事がある。

あれは真希を教会に連れて行った時だったな。僕はクリスチャンファミリーに生まれて幼いころから母親に連れられて教会に通っていた。で、14歳の時に洗礼を受けた。ただ、僕自身はそんなに熱心な信仰を持っていたわけでもないし、毎週欠かさずに教会に通っていたわけでもないんだな。だから真希を教会に連れて行ったのも伝道しようとかそんな底意があったわけではなくて、何となく話の流れで一緒に行く事になったとか、そんな事だろうと思う。あんまり覚えていないんだな。

その日の朝、真希と一緒に教会に行き、僕は教会中みんな顔見知りだもんだから、みんなに真希を紹介して回ったな。

「友達の真希ちゃんです。」

とか何とか。真希も愛想がいいから、

「こんにちは。真希です！」

とかまあ、そんな感じで。で、教会だから当然礼拝があるわけね。その礼拝では讃美歌を歌ったり、献金したり、色々あるんだけど、メインは牧師先生の説教（お話）な訳ね。その日もいつも通り説教が始まって、僕は

「あーあ、だりいな。早く終わんないかな。」

って感じですぐさま爆睡しちゃった。で、目覚めると説教が終わってて、説教後の讃美歌の時間になった。で、隣に座ってる真希に讃美歌のページを教えてあげようと思ってさ、真希の方を見たんだ。そしたら真希、黙って泣いてた。僕はビックリしちゃって、だから今でもはっきり覚えてるんだけどさ。

礼拝が終わって、二人で教会を後にして歩き出したら、真希が

「牧師先生の話聞いてたら泣いちゃった。」

って言ってちょっと恥ずかしそうに、でもにっこり笑った。僕は

「ふーん、どんな話だったの？俺、寝てたから全然分かんないんだけど、そんな感動的な話だったんだ。」

って聞いたんだ。そしたら真希は、

「うーん、真希も話の中身はあんまり理解できなかったんだけど、聞いてたら勝手に涙出てきた。」

だって。

牧師先生ってやたらと「救い」とか「あなたはそのままでいい」とかそんなような事を言うんだけど、やっぱりどう考えても真希は辛い状況に置かれていたわけで、そういった類の言葉を必要としていたのかもしれない。まあ、僕は真希にそういう言葉を言ってあげる事は出来なかったし、牧師先生の言葉で真希が本当に救われたかどうかなんてわからない。でも、それほど辛い中で、真希が普段は絶対に泣かなかった事、その真希の強さは変えようのない彼女の魅力だったし、僕には眩しかった。そして、その眩しかったっていう思いは、今も僕の頭の中にしまっていて、時の洗礼を受けてその純度を増す。で、ふとした瞬間にきらりと眩しくて、僕は真希の事を思い出す。

とまあ一応、真希の話はここまでにしておこうと思う。そもそも、この話は蘭のことについての話だったんだものね。ただ流れ上、真希の話は避けて通れなかったんだよな。はい、いよいよここから蘭の話がはじまります。どうぞよろしく

。

3、「記憶2、蘭」

初めて蘭と会った日、今僕はその日の事を思い出そうとしている。なかなか「はっきり」と「克明に」、という訳にはいかないのだけれども、その日は太一と真希と一緒に遊ぶことになっていた。という事は既に正平がいなくなっていて、まだ太一がいなくなる前のある日の事なんだろうけど、時系列に関しての記憶があいまいで確信は持てない。唯まあ、思い出なんてそんな程度のもなのだろう。

でもとにかく、その日は三人で遊ぶことになっていて、授業中に真希から「私の従妹と一緒に遊びたいって言ってるんだけどいい？」という旨のメールがあって、急遽その従妹を含めた四人で遊ぶことになったのだ。いつもの様に、授業が終わってから新大久保駅の改札口の前で待ち合わせていた。改札口に着くと、真希は先に到着して僕達を待っていた。「おっす。」

「オッス、遅かったじゃん。」

挨拶を交わして、「あれ、従妹が来るって言ってなかったっけ。」と思ったら、真希の後ろにチョココンとくっついている女の子がいる。モジモジしている、そんな感じで黙って立っている。

「あ、この子があたしの従妹で蘭っていうの。よろしくね。」

真希が紹介する。

「あ、よろしく。」

僕も太一もそれに応じて挨拶した。歳は僕等の一つ下の十五歳だそうだ。真希に紹介された蘭はそれでもまだモジモジしていて、コクッと小さく頷くだけだった。

蘭の見た目は、ストレートの黒髪で前髪を真直ぐに切りそろえていて、ちょっとヘルメットみたいだな、と思った。パッチリと大きな目をしているんだけど、上目づかいだからかな、オドオドしている小動物みたいな、そんな印象を受ける。体系はポッチャリである。ただ、これは僕が常日頃から思っている事なのだけれど、「ポッチャリ」とはどの辺までをポッチャリというのだろうか。「ポッチャリ」と書くとそれを読んだ人によってかなり印象が変わってくるのではなからうか。ある人から見ればポッチャリでも、それをまた別の人が見ればデブだと思うかもしれない。かなりその線引きが難しい言葉である。そして、僕は肉好きのよい女の子が嫌いではない、いやむしろ結構好きなのかもしれない、という事を言うておかなければならない。蘭はそんな僕が見れば、かなり境界線に近い所にはするものの、やはりポッチャリとした女の子であった。でも、全体的にみればちょっと可愛いと言えなくもないな、と思った。ちなみに、そういう観点からすると、真希はどちらかと言えばデブの部類に入ると言わなければいけないのかもしれない。

その日はその後、高田馬場の駅ビルでボーリングをして遊んだ。僕はボーリングはあまり得意ではなくて、その日のスコアは100点前後だった。太一はサッカーをしていたり、運動神経が良く、ボーリングも上がった。140点ぐらい取っていたと思う。真希と蘭は、うまい下手以前の問題で、ガーターを連発してボーリングになっていなかった。10点とか、それぐらいのスコアだったと思う。

僕は無邪気な少年だったから、すっかりゲームに熱中して、蘭ともいつの間にか打ち解けた気になって、戻ってきたボールを取ってあげたり、そういうちょっとした瞬間に「もう馴染んだでしょ」的な空気を出してみたりしたのだけれど、蘭の方は相変わらず恥ずかしがっているというのか何というのか、モジモジとしていて、ほとんど言葉を発しなかった。それでいて、何やらコソコソと小声で真希に話していた。真希の方は蘭のそういう人見知りには慣れている様子で、気にする風もなく快活にボーリングを楽しんでいた。

その日は終始そんな感じで終わった。だから、僕の第一印象としては、蘭は大人くてあんまりしゃべらない子なんだな、あんまり面白くなかったのかな、という感じだった。つまりはあよく分からなかった。ただ、その日の帰り道に真希から

「お疲れ、蘭も今日は楽しかったって。また来たいって言ってるから、次も連れてくるね。」

というメールが来た。あんまり楽しそうには見えなかったけどなと思い、ますますよく分からなかった。

とまあ、僕と蘭との出会いはそんな感じだった。ほとんど話す事もなかったので、蘭がどういう女の子なのか、という

様な事も分からなかった。ただその後も一度、蘭は真希に付いてきて、四人で一緒に遊んだ記憶がある。その日は池袋でサンシャイン60の水族館に行った。昼間から遊んだ様な気がするから、土日が祝日かなんかだったのだと思う。入館料がやたらと高かった。

一緒に水族館を廻った事は覚えているのだけれど、具体的にどんな様子だったかはあまり覚えていない。確か、蘭はその日も打ち解けることなくモジモジとしていてほとんど話さなかった。ただ、その後蘭と付き合うようになったから彼女が僕に積極的にしゃべるとい様な事はなかったから、もともとそういう女の子なのかもしれない。

そんな感じに、その日は記憶があいまいになってしまう様な、特にこれと言った事のない一日だったのだけれど、その中で一つだけ、鮮明に覚えている光景があるので書いてみようと思う。

水族館に入ったものの、水族館なんて魚に何の興味もない人間からすれば退屈極まりない場所だ。それでもまあ、せっかくお金を払ったんだからという気持ちもあり、色とりどりの魚達が水槽の中を泳ぎまわっている様子は「へえいろんな魚がいるもんだなあ」程度の感慨を与えてくれる。

僕と太一は順路に従って、水槽ごとに書かれている解説と実物を見較べて、

「この解説はこの魚だろ。」

「いや、あれだろ。」

とか、

「あれ、この解説の魚見つからないよ。」

とか何とか言いあいながら、それなりに水族館を楽しんでいた。

一方で残りのお二方、真希と蘭は、最初のうちこそ

「へえ。」

とか言って水槽を見ていたけれど（蘭は言ってなかったけれど、見てはいたな）、もはや魚への興味は失せたらしく、二人で固まって何やらしゃべくりながら、僕等の後ろをついて歩いて来るだけになっていた。蘭に関して言えば携帯をいじっていた。

と、何やら二人で蘭の携帯を見ながら言い合いになっている。気になったので、一旦水槽から目を離し、

「どうしたの？」

と尋ねてみた。蘭はちらっと僕を見て、恥ずかしそうにチョコッと笑って、手に持っている携帯を見る。

真希が

「携帯の電池切れちゃったんだって。」

と教えてくれる。僕はちょうどちょっと前に学校の友達から電池を復活させる方法を教えてもらったばかりだったので、

「あ、電池復活させる方法知ってるよ。ちょっと貸してみて。」

と得意になって手を差し出した。蘭はちょっと迷ってから、僕に携帯を渡した。僕は充電電池の端子の部分に息を吹きかけるといいと教えてもらっていたので、（ファミコンソフトでもそうだけど、ほとんどおまじないレベルの迷信を人はなぜ真に受けてしまうんだろうと、今でも不思議だ）蘭の携帯の電池カバーを開け様と試みた。とその瞬間、蘭が

「あ。」

とビックリした様に声をあげた。僕は何が起こったのか分からずにキョトンとしてしまった。が、蘭の携帯に目をやって状況を理解した。

蘭の携帯の充電電池には大きなプリクラが貼ってあって、そのプリクラの中では蘭と男の子が接吻をしていた。僕はビックリして即座に電池カバーを閉じた。

「ご、ごめん。」

そう言って蘭に携帯を返した。僕としては（僕としなくてもそうだろうけど）まずいことしちゃったなあ、と思い、非常に気まずかった。蘭はとても恥ずかしそうな、「まずいもの見られちゃったなあ」とい様な表情で、でもいたずらっぽくチョコッと笑っていた。

この一連の光景だけは鮮明に覚えている。接吻プリクラを見てしまった時のまずったなあ、という焦りというか恥じらいというか、感情が大きく起伏した一瞬だったから覚えているんだと思う。そして、ずっとモジモジと人見知りをして、その実を内に秘めていた蘭の人っぽさというか、そういう部分が初めてチョコッとだけ、表に出てきた瞬間だったからだ

ろうと思う。

その後、四人で遊んだ記憶はない。だから暫くはまったく接触のない期間があったと思う。ちょうどその頃（15歳、中学3年生の終わりごろだと思う）、僕は柔道部に入部して忙しくなり、蘭はおろか、真希ともほとんど連絡を取っていなかった様に思う。だから、この二回の交友で蘭が気になったとか、好きになっちゃったとか、そういった事はまったく無かったのだと思う。ほとんど会話を交わす事もなかったのだから、当然と言えば当然である。

そして暫くの時を置いて、蘭との次の記憶は16歳の春、突然に再開する。

高校生になって（正確には中学三年生の終盤だったかな。中高一貫校だったから。）僕は柔道部に入部した。そして、練習漬けの毎日を過ごすようになった。練習の度に先生にどやされながら、ただひたすらに技の打ち込み練習をし、乱取りでは90キロ超級の男たちに投げ飛ばされ続ける。それが僕の日常になった。練習が終わればと精も魂も尽き果て、真っ直ぐに家に帰り、ベットに倒れこみ、眠った。目をつむったかと思うと、瞬く間に朝がやってきて、起きようとするとなんか全身が筋肉痛、金縛りにあった様ななかなか動けなかった。

毎日が目まぐるしく過ぎ去り、あっという間に一週間が経ってしまう様になった。僕はもりもりと飯を食うようになり、目に見える程に体つきが変わっていった。胸板が厚くなり、肩幅が広がった。精神の方まで鍛えられたのかどうかは定かではなかったが、明らかに肉体は逞しく変化したのだ。僕はその事が嬉しくてたまらなかった。その喜びから、僕はますます練習に没頭した、と書けばカッコいいのだろうが、真実はそうではないのである。肉体の進化は嬉しかったが、練習の方はちょっと筋肉がついた程度でその苦しさが軽減される様な甘っちょろいものでもない。相も変わらずに苦痛のものであった。

僕はその性格的に、耐え忍ぶとか、地道にとか、そう言った性質の努力が大の苦手な人間であった。そのため入部して三カ月もすると、新しい事を始めたという新鮮さもすっかり消え失せて、急激な肉体の進化もそのスピードが緩やかになり、僕はすっかり柔道に対する情熱を失った。「俺はもう十分に強くなった。」と、甚だ傲慢な勘違いをして、努力をしない口実にした。そもそもが軟弱者なのである。しかし、そんな気の抜けた態度はすぐに練習態度にも反映され、僕は顧問の先生に目を付けられるに至った。「目を付けられた」と書くとは何か期待されているという様なニュアンスを含みがちだけれども、僕の場合にはそのようなニュアンスは全く無く、ただ「忌み嫌われ、しごかれた」と表記する方が正確かもしれない。

こうなってしまうと、僕は練習が嫌で嫌で堪らなくなり、学校に行く事さえも嫌になってしまった。こうして僕の退部までのカウントダウンが始まったかの様に思えたのだが、この柔道部の顧問は学校内では絶大なる権力を有しており、柔道部を止めた生徒に対しては冷徹極まりない態度でもってそいつを苛め抜く事で有名だった。つまり、退部＝残りの学校生活は地獄という方程式が出来上がっていた。つまり、入部三カ月で辞めたくなくなってしまった僕の場合、残りの二年半以上を奴につけ狙われる事を覚悟の上で辞めなければならないのである。

当然の事ながら軟弱者の僕がそんな根性と精神力とを持ち合わせているはずは無い。つまり、辞められる訳がないのだ。顧問の野郎も僕のそんな心理状況を見透かして、

「てめえ、辞めたいんならいつだってやめていいんだぞ。」

そう言って、僕に次々に腕立て伏せ等の肉体的拷問を強要し、僕の繊細極まりない神経は奴によるストレスでズタボロにされた。

結局、僕は高校二年生の冬に引退するまで（つまりは最後まで）柔道部を辞めなかった。最後まで顧問とはウマが合わず、嫌われっぱなしだった。その嫌い様と言ったら半端ではなく、ほとんど憎んでいるの域に達していたと思う。それを端的にあらわすエピソードとして、引退に際して顧問が僕に対して放った言葉を紹介しておこう。

「今後、お前の人生は全部失敗する。大学受験も絶対に落ちる。何故ならお前は人生をなめているから。」

これが奴の僕に対する門出の言葉である。ちなみに大学受験は現役で合格し、奴の予言は見事に外れた。

僕の柔道部での苦勞話を書き始めたらきりが無いが、それを書いていると別の話になってしまうのでやめておこうと思う。がとにかく、ご本大好き少年の僕は、柔道部での高校生活を通して体育会系のノリの何たるかを身をもって体感し、耐え抜き、そして自分のスタイルには合わんと悟った。

えーっと何の話してたんだっけ。そうだ、高校で柔道部に入ったんだけど即効で飽きた所だったね。そう、大変だった

んだよ。そんなもんだから、当然真希と会ってる時間も無くなっちゃって、最後の一人だった僕までも彼女から気持ちが離れて行っちゃった。薄れていったって言うか、忘れちゃってたんだよね。頻繁に連絡を取り合う事も無くなっちゃってさ。

折りも折、そんな折、真希から一通のメールが届いた。

「おはよー。なんだか最近会ってないね。忙しいのかな。あのさ、蘭がヒロトのアド教えてって言うから、教えちゃってもいいかな？」

こんな文面だった。今まで書いてなかったけど「ヒロト」は僕の名前ね。

すぐに、

「教えちゃっていいよ。」

と返信した。でも、なんで俺のアドレスなんか知りたいんだろう、と不思議な気分だった。蘭と最後に会ってからずいぶんと（数か月）時間が経っているし、そもそもその時だって僕と蘭は殆ど話さなかったのだから。蘭が僕に対して興味を示す理由が見当たらなかった。

でも僕は真希に

「教えちゃっていいよ。」

と送った。僕と蘭の間には関係性が何もなかったから、当然だけど拒む理由もなかったのだ。考えてみれば、これが蘭から僕へのファーストアクションな訳で、やっと始まったんだと考える事も出来る。

「蘭はどんな子なんだろうか。」

それを思い、ちょっと知りたくなって、「不思議だ」と感じる心が少し「知りたい」という楽しみに変わった。

真希に返信してから小一時間して、蘭からのメールが僕の携帯電話に届いた。いつメールが届いてもいいように、携帯をジーンズのポケットに入れてあったから、携帯はブルブルと僕の太股を震わせてそれを知らせた。

「こんにちは。蘭です。

ひさしぶりだね。

いきなりメールしちゃってゴメンね。

よろしくね。

ヒロトは高一になったんだよね。

部活は決まった？」

こんな感じの文面だった気がする。けど、覚えていない。違っているかもしれない。もしかしたら、記憶を捏造してしまっているかもしれない。でも、思い出せないのだから仕方がない。捏造もひっくり返して話を進めていくしかないだろう。ただ、ここで言うておきたいことがある。本当は覚えているのに、故意に違う風に記憶を捏造する、という様な事は一切しない。本当に思い出せない時に限り、已む無く、

「こんなんじゃなかったっけな。」

と想像して補うにとどめる。

とまあとにかく、蘭からの初メールが届いた訳だけれども。僕は文章を読んでいる時、脳みその中で誰かがその文章をナレーションしている。声になって読み上げられて初めて、意味として頭に入ってくるのだ。で、その文章が直接知っている人間の書いたものである時は、僕の脳内ではその人の声でナレーションが行われる。知らない人間のものである場合は、想像上のそいつの声でナレーションが行われる訳だが、面白い事に作家ごとにそれぞれ違う声でナレーションが行われる。その文面から読み取られるイメージが声に変換されるものだから、それぞれ作家ごとに違う声になるんだろう。だから、面白い事に、僕がある特定の作家の事を思い浮かべる時、まず初めに、その人の本の作品名でも文体でもなくて、僕が勝手に作りだしたその人の声が聞こえてくるのだ。で、僕の好きな作家はその人の声にも愛着を持っている。嫌いな作家は、声が気に食わなくて嫌いになっちゃったのかもしれないな、なんて思う。

蘭とはメールでやり取りすることが多かったから、当然ながら僕の中には蘭のメールの声というものが存在する。そして、この蘭からの初メールを読んだその瞬間に、その声は作られた訳だ。どんな声だったろうか。甘ったるくて、ぶりっ子っぽくて、どこか誘ってくる様な、そんな声だった気がする（これじゃ分かんないよね）。でも、当の本人とはほとんど喋ったこと無いから、本当はどんな声しているのか分かんない訳。だから、僕にとっての蘭の声は「メールのナレーションの声」と「実際の声」と二つの声があるっていう不思議な状態だった。そして今、こうして蘭の事を思い出そう

とすると、なんだか聞こえてくるのはナレーションの方の声だ。

それから暫くは蘭とのメールのやり取りが続いたのだが、実際に蘭に会って話すまでの間、僕は自分の創りだした蘭の声とお喋りをしていた事になる。僕は蘭とどんなメールをしたんだろうか。一つ一つは覚えていない。「どんな音楽を聴くんだ」とか、「今テレビ見てる」とか、そんな他愛もない内容だったと思う。それでも僕達は一日に何通も、次第に何十通も、メールのやり取りをした。

メールでの蘭は実物の様に静かじゃなくって、饒舌で、エッチな話が好きだった。初めからそうだった訳ではないのだが、一週間位してそうになった。

「ヒロトは今付き合っている人いるの？」

「いないよ。」

「今までに付き合ったことある？」

「ないよ。」

「あたし、童貞の人が好き。」

こんな感じのやり取りが蘭の下ネタメールのはしりだったと思う。僕に気があるという事を伝えたかったのか、やたらと文末にハートマークが付けられていた。でも、単に発情していただけなのかもしれない。

「童貞」という言葉を使う位ならまだ可愛いものだったのだが、彼女の下ネタは次第にエスカレートしていった。

「今、買い物してるんだ。」

「ふーん。何買ってるの？」

「パンツ。」

「ふーん。」

「ねえ、ヒロトは水色と黒、どっちがいいと思う？」

「うーん、水色かな。」

「じゃあ、そうしよう。」

まだ、付き合ってもいない男にそんな事を聞くのは変ではないだろうか、というその当時の僕の思いが文面に表れている。

極めつけのやり取りを紹介しよう。メールを初めて二週間くらいが経っただろうか。夜中、家族も寝静まった頃、蘭からメールが来た。

「起きてる？」

「起きてるよ。」

「何してたの？」

「部屋で本読んでた。」

「ふーん、ヒロトはオナニーしないの？」

「するけど。」

「蘭ね、今、オナニーしてるんだ。」

この時点で、僕はゲンナリした。最近下ネタメールが多かったとはいえ、ここまで露骨に言われては、多感な少年の純真さも行き場が無い。

「そうなんだ、気持ちいい？」

シカトするのもあれなので、一応聞いてあげてのだ。すると蘭は

「うん。気持ちイイよ。アッ、アンっ。ねえ、蘭のオマンコ見たい？」

と返信してきた。完全にその気だ。喘ぎ声まで打ってある。オナニーしながら自分の喘ぎ声をメールするのってどんな気分なんだろうか。打ってて白けたりしないのかな。僕は、はっきり言ってドン引きしていた。が、ここで

「別に見たくない。」

と返信したら間違いなく蘭は傷つくだろう。恥を書くだらう。それは可哀想だ。それに女のオマンコはどんな風になっているんだろうか、興味が無いと言えようそになる。

「うん、見たいよ。」

そう返信する。と、一分足らずで写メール付きのメールが来た。

「はい、蘭のオマンコだよ。ねえ、まだピンクなんだよ。どう？」

その文面と共に添付された写メールには、オマンコがドアップで写っていた。こうして僕は人生初オマンコを拝んだ訳だが、それはエロ本に書かれている様な素晴らしい代物には見えず、特に感動はしなかった。オマンコはオマンコという「物」だった。本当に、その時のオマンコはただの「物」にしか見えなかった。愛でるべきものでもなく、特別な思い入れを持つ対象にはなりえず、その奥には愛とやらも、恥ずかしさも、胸キュンも、この女となら死ねるという決意も、無く、どんな精神性も持ち合わせてはいなかった。「物」そのものに、僕は何も感じる事が出来ず、その事が悲しくさえもあった。僕が女の子に求めていたのは「物」ではなくって、弱さとか、涙とか、愛しいだとか、そういった精神性の方だった。その当時、尾崎豊を聞いて、村上春樹を読んでた。彼ら表現者が奏でる「愛」と、目の前のディスプレイに表示されている「オマンコ」との間にはあまりにも大きすぎる隔たりがあった。

蘭は僕が喜ぶと思って、一連の下ネタやらオマンコ画像やらを送ってくれたのだろうが、僕としてはそれらを見せられる度に、違和感を感じ、距離感を感じずには入れなかった。だから、はっきり言って、僕は蘭のオマンコ画像を見てひどく傷ついてしまったのだ。

「僕はこんな「物」が見たい訳じゃない。」

と。

「僕を馬鹿にしなしてくれ。」

と。なんだか蘭が汚らしいものの様に感じられたのを覚えている。

今思うと、この一連の僕の「感想」というのは、一重に僕の「幼稚さ」を表しているし、それゆえの「傲慢さ」を表している。幼かったのだ、単純に。だから、女の子が、というよりは人間は「物」であるという一つの側面を受け入れる事が出来なかった。で、愛だとか精神だとか、そういった目に見えない類のものばかりを求めすぎていて、それだけが崇高だと思い込んでいたのだ。また、それゆえの

「崇高なものを求めている俺は崇高。」

という典型的な、そして間違いなく愚かなナルシズムにも陥っていた。

今現在、22歳の僕は未だに「愛とは」とかそういった類の問題に対して、偉そうな見解を述べる事は出来ない。がしかし、16歳の頃に求めていた「純粋な愛」とやらとまったく同じ性質のものを未だに求め続けているかと聞かれれば、そうではないと思う。まったく違っているのかと言えば、またそういう訳でもないんだが。

「やりたいだけか。」

という紋切り型の質問があるが、やはり、それだけではないんだろうなと思うんだ。でも、

「はい、これが愛です。」

と手にとって差し出して、見せる事の出来る代物でもない、とも思う。精神は肉体に宿る、じゃないけどさ、「物」ってそんなに矮小なものではないと思うんだ。好きな女の子の「おっぱい」が愛しいというのは自然な感覚だろうし、それを疑ってみても仕方がないだろう、と思うんだ。だから、それこそさ、飲尿プレイだとかスカトロだとか、そういうさ、いわゆる変態プレイみたいなものってさ、どうしてもタブーになっちゃっているとは思っただけ、

「めっちゃ好きだったら、その子のオシッコを飲めるかもしれない。「飲める」というよりは「飲みたい」と思うかもしれない。」

そう思ったりもするんだ。ションベンさえもっていう愛もあるんだろうなっていう。で、それはすごい愛なんだろうな、って。まあ、僕はしないけどさ。

話がどこかに飛んでしまった。そう、僕はオマンコ画像に返信しなきゃならんのだった。

「どう？」

と聞かれて、

「「物」ですね。」

って答える訳にもいかんしな。

仕方が無く僕は、

「綺麗だね。」

と返信する。がこういう時にそれ以外の答え方があるのだろうか。この無言の圧力と言うか、思考停止の強要と言うか

、そういうものに僕はいつも怒りを覚える。でも、いざ自分の身にそういった同調圧力が降りかかると、それに屈してしまう事も多い。そんな自分にも腹が立つ。

まあ、今はそれはいいや。最近それまくってるしな。

そうこう言っているうちに蘭から返信が来た。

「ヒロトのチンコも見せて。」

絶句。

絶句である。もう、言葉は出ないのだ。だから、何も考えられない。ただ、蘭に恥を搔かせてはいけない。もう、それだけである。携帯のカメラを起動し、パジャマのズボンを下ろす。が、現状としてフニャンとしている僕のチンコを撮って送る訳には行くまい。男としての沽券にかかわる、というより何より、彼女が求めているのはそれではない。という事で仕方なくシャカシャカと始める。

一分後、僕は何とか元気にしたチンコの撮影に成功し、それを蘭に送る。と、即座に返信が来る。

「ヒロトの大きいイイ。イイ。」

耐えきれず、笑ってしまう。画面からでは大きさは判定できないはずだし、温泉に行けば分かる、俺のは並以下だ。が、それよりも何よりも、この文面、そしてそれを打っている彼女の姿が思われて、吹き出してしまう。

その後、蘭は文面上でイキ（あまりに陳腐なのと、もう書きつかれたので具体的には書かない）、無事眠りについた。

その当時も今も、不思議でならないのは、一体蘭はどのような心理からこのような行為に及んだのかという事だ。分からん。考えて分かるなら、とっくに分かっているはずである。あまりに分からないので、友達にこの話をする時には「真性の淫乱だった。」とか「気がふれていた。」とか言って説明しているが、どうもその説明ではしっくりといかない気がするのだ。まあ、おいおい考えていこうと思う。

4、「数年後、現在。記憶から遠く離れて」

蘭が顔を歪め、我ここにあらずの様子で僕を置いてどこかに行ってしまった。事に及んだ際、彼女はいつもそんな感じだったな。彼女の悦に入る顔を思い浮かべている途中、ふと我に返って、「何を思い出しているんだか」と自嘲的な気分になった。何年も昔の事、もう二度と会う事もないだろう女の事、そんな事を思い出して一体何の役に立つだろう、それも何度も何度も。ぼうっと物思いに耽ると初めは違う事を考えていても、巡り巡って結局は蘭の事を思い出している。甘く切ない青春のなんちゃらと言う様な心もちでそうするなら、それはそれでいいだろう。けども、僕の場合は全然そんな感じじゃない、「奇妙だったな、珍妙だった、一体あれは何だったんだろう」と、腑に落ちないという気分が心に引っかかって、それで思い出してしまうのだ。もう今後解けるはずもない問題をウンウンと唸りながら考えている。フェルマーの最終定理だっけか。あれは証明されたんだっけな。

「ふんっ」

とやる気を出してベッドから上体を起こし、部屋の明かりを付ける。時計を確認すると、短い針が4の数字を指している。窓の外には橙色の空があって、「ああ、今日も研究室に行き損ねたな。」とうんざりする。もう何日行ってないだろうか。「明日は行こう」と思うのだけど、行けばきっと教授にゲンナリする程の嫌味を言われるんだろう。そう思うと、余計に研究室に行けなくなる。こんなんで卒業できるのだろうか、と言うよりも卒業できたとして、どうするのだろうか、俺は、俺は。

大学4年で日々研究室に通い、人類の未来の為に熱心に研究をおこなっているはずの僕。そんなはずの僕は卒業しても何になるということはない。大学院への進学が決定しているが、研究者になる気など毛頭ない。2年の延命措置に過ぎない。もし仮に僕がすっかりその気であったとしても、教授の方は僕を研究者にする気は毛頭ないだろう。相思相愛という言葉があるが、僕等の場合はその真逆も逆である。箱に閉じこもって若者をいびる仕事なんて、くそくらえだ。

とはいえ、じゃあ卒業したら僕はどうするのだろうか。会社で働くのだろうか。そうなればひとまず安心してところだが、いくら僕が働きたいと思ったところで、肝心の会社様の方が「うちで働いてください」と言ってくれない事には働けない。惚れた腫れたと一緒にだ。では、その女みたいな会社が「うちに欲しい人材だ」と思うのはどんな人間か。という事が問題になってくる訳だが、それに関しては本屋さんにも行けばそれ専用の本がごまんと売られているから、詳しくはそっちを参考にしてほしい。

で、僕個人の問題に話を戻す。と、その前に、余計かも知らんが僕なりの意見とやらを書いておこうか、一応ね。きっと、会社様が欲しいのは、トイプードルみたいな奴じゃないかと思う。別にチワワでもいいんだけど、要するに愛玩犬みたいなやつね。同じ犬でも主人に噛みつくような犬は駄目、特にドーベルマンみたいな強くて獰猛そうなのはだめだろうね。ご主人様ビビっちゃうだろうから。そういう意味で言って、僕は何だろうな。まあ、愛玩犬じゃないだろうな、狩猟犬ほど強くも逞しくもないだろうけどさ。間違って豚かナマケモノってところだろうか。まあ、どうでもいいか。

とにかく、僕は今宙ぶらりんな訳だ。何も生み出さず、親の金で呑気に反抗ごっこかましている学生ちゃん。何の形も持たない。よく「モラトリアム」なんてカッコいい言葉にして言うけど、うんざりだね。早く労働者になりたいね。愛も夢も捨てて、ただ飯食うためにボロ雑巾のようになるまで働く労働者。僕は労働者になっても、そうなる前に適当にサボるだろうから、なれそうもないから、余計にカッコいいと思うよ。だから、タバコは労働者の煙草「ハイライト」を吸っているんだ、きついからメンソールだけどね。

そんなこんなをウダウダ考えながら、家を出てプランプラン歩いてたらお目当てのミニストップに付く。僕は雑誌を立ち読みしたりはしない主義なので（文字には金を払う、なくても払う）、真っ直ぐレジに行って注文する。

「ハイライトのメンソール一つと、グリルドックオリジナル一つ。」

「うい。」

店員がやる気無く返事をする。このコンビニの店員は本当にやる気が無い、そのせいか肌まで貼りが無くカサついている。まあ、コンビニの店員がやる気マンマンでもウザいけども。

金を払って品物を受け取り（ホットドックは少し待つ）、そそくさと店を出る。道すがらホットドックを頬張り、食べ終わる頃には家に付く。家賃37000円のアパート。都内ではありえないけども、茨城ともなればこの値段でそこそこまじな家に住める。親の金だが。中古の車まで持っている、駐車場は無料だ。その車だって親に買ってもらった。こちら辺は車が無いとどうにもならんからな、チャリじゃどこにも行けない。本格的に閉じ込められる。

家に戻ったが、することもなく、論文を読まなければならないのだが、全く読む気は起きず、再びベットに横になる。そもそも、大好きな小説を読む気にもなれないのだから、植物のホルモンがどーとかというんでもなくどーでもいい事が英語で書かれている論文なんて読む気になれる訳がない。がしかし、横になったものの、今日は既に17時間も睡眠をとっているためにそうすんなりと都合よく眠りは訪れない。そもそも、午後4時に起きる事が間違っている。どうせ今夜も明け方まで眠れず、明日は起きられず、また夕方に起きる事になるんだろう。悪循環、負の連鎖。どうしてこうなっちゃうんだ。くそつたれが。

きっと、昨日の俺が悪いんだ。そして、昨日の俺は一昨日の俺のせいで悪くなったんだろう。そうやって元を辿っていくと、どこにたどりつくんだろう。そんな事分かったとて、何にもなるまいが。要するに、今日の俺が踏ん張らんことには、明日の俺はまた迷惑こうむる訳で、でも俺はそんな安っぽいハウツー本みたいな事に触発されるのが一番嫌いだから、踏ん張る訳にはいかないのであって。そもそも、頑張るといったって、凡に墮することなくそれをするのは容易じゃないぜこりゃ・・・。

グルグル、グルグル、また夢に落ちて。

5、「ぶり返す、記憶。ぐっちゃ。」

薄暗闇の中で、二つの黒い大きな瞳が僕を見つめている。自分の瞳をまじまじと見つめることなどない。鏡を使えば可能なのかもしれないが、自分の顔なんていうものは見慣れないものだから、ずっと眺めているとなんだか頭がおかしくなってしまいそうで変な気分になる。だから、瞳をじっと見つめる時は、その瞳はいつも他人の瞳だ。

何を見つめているのか、それが知りたくて蘭の瞳をじっと見つめ、奥の奥まで見ようとして、でも彼女の瞳にはじっと見つめる僕の顔とその後ろの部屋の様子が映るばかりで、結局蘭が何を見ているのかなんて分からない。すると蘭はニッコリと笑って、

「ヒロトでいっぱいだよ。」

と言う。僕は何て答えればいいのか分からなくて、ただ

「うん。」

とだけ言って、ちょっと弱った様な曖昧な表情を作って微笑み返す。

見つめ合っているのが気まぎらくなって、視線を外す。そこには半裸の肢体が横たわっていて、それを紫色のブラックライトが照らして、何とも言えない色をしている。太陽の光の下で見る人間の肌はこんな色をしていない。その肌の色を見ているのも嫌で顔を上げると、部屋の壁には海面から飛び上がったイルカの絵が浮き上がっている。部屋に入った時には気付かなかったから、ブラックライトで浮かび上がる様な蛍光塗料を使っているのだろう。この部屋は蛍光灯の明かりを消すとブラックライトが光る様に出来ているのだ。カラオケボックスの一室で、僕と蘭はつながっている。

セックスの時に限って、蘭は雄弁だった。喘いだり、愛していると言ったり、少女マンガの受け売りの様なセリフを並べたりと、忙しい事この上ない。そのくせ、普段は（例えば喫茶店にいる時とか、街を歩いている時とか、要するにセックスをしている以外の時）全く喋らない。僕が一生懸命に尾崎豊や村上春樹の素晴らしさを説明してみても、うんともすんとも言わないで、僕の手を握り、指先でくすぐり、その大きな瞳を潤ませて僕を誘うのだ。

蘭は一事が万事、性にひっきりなしだった。映画館に行ってもハリポッターそっちのけで、僕の手を自分の股間に導き、「触れ」とせがむのだ。潤んだ瞳で僕を見つめて、ニヤリとするのだった。隣の席の子連れの女の人がその様子に気づいて、責める様な目つきで僕を睨んだ。でも、蘭はそんな事にはお構いなしだ。青いパンツにまあいいシミが出来ているんだ。

そんなじゃなかった。もううんざりだった。好きで好きで、恥ずかしくてたまらなくて、チラッと目が合っただけで喉から心臓が飛び出してしまいそうになってしまって、会えない時に思い出せば胸が締め付けられて息が出来ない、16歳の僕が求めていたのはそういう類の関係だった。股をおっぴろげて「恥ずかしい」だなんて、ちゃんちゃら可笑しいや、と思った。

結局、蘭との関係は3カ月くらいで終わった。僕から連絡を絶った。メールが来ても、電話が来ても、シカトした。蘭からの連絡はすぐに来なくなって、ほっと胸を撫で下ろした。後になって「ひどい事をしたな、彼女を気づけたかもしれない」なんて思ってみたりもしたが、考えてみれば、というよりもそんな事を考えるまでもなく、僕はひどい事をしたのだし、僕にはそんな風に心を痛める資格さえもないのだと思い直した。反省して自己免責しようだなんて、何とも卑劣な行為だ。僕は、蘭との関係を放棄し、逃げ出したのだ。そしてその後、蘭と会う事は二度となかった。

それが一般的なものとかけ離れているのかどうかすら僕には分かりかねるが、とにかく僕が初めて女性という存在に直面した一部始終は今書いた通りだ。そして僕は、蘭という僕にとって初めての女性を通して、戸惑いというものしか感じえなかったのではないかと思う。その事は、その後の僕の女性との関係の築き方というか、距離感の測り方とか、そういったものに少なからぬ影響を及ぼした様に思える。影を落としたり、という言い方が似つかわしいかもしれない。影響という点では、良かろうと悪かろうとそれが後を引くというのは当然の事なのかもしれないけれど、何度も思い出してしまうのは、それが出発点だったからに他ならない、と思っている。

蘭から逃げ出してから、今まで僕は何人もの女の子を好きになった。数え切れないほど、とは言わないけれど、両手の指の数に少し足りない位の人数の女の子を好きになった。その度に、ドキドキとして舞い上がって、一人でいる時にはその子の事を思って胸が苦しくて仕方がなくなった。でもいつも、一体どうすればいいのか分からなかった。気持ちのやり場に困って、もてあまし、途方に暮れた。きっと、「基準」が無かったからそうなったのだ。いや、蘭という「基準」だけが僕の中であって、それは性というベクトルに振り切れてしまっていたから、僕は何も計る事ができなかったのだ。判断するという事が出来なかった。分かり合うという事も、分かち合うという事も、一向に僕の目の前に実感として表れる事はなかった。

そのためか、誰かを好きになる度に僕は怯え、恐れて、駆られる様に猛進した。真っ暗闇の中を疾走していたのだ。そんな僕の標的にされた女の子たちは、恐かったのか鬱陶しかったのか、その両方かあるいはそれ以外か、知らんが、僕には知りようもない事だが、とにかく結果としては、例外なく僕から逃げていった。

何も見えず、真空ならぬ真暗の中、そこは死の匂いの様なものと僕を感じる何かが充満していた。僕は焦り、苛立ち、胸の中がひりつく様に乾燥して、焦げ付いて、僕は痛みを癒そうと渴望し、本当に死に物狂いで駆けずり回ったのだった。それでも、それゆえか、僕は逃げ惑う彼女たちの後ろ髪に掠ることさえなかった。

しくじるたびに、僕はきっと他の男たちと同じ様に落胆し、「ああ、俺は不幸だ、誰よりも。また、それゆえに特別なんだ」なんて傲慢極まりない事を思い、しかしそれは位は敗者の特権じゃないかと開き直り、存分にいじけた。また、その度に数少ない友人をつかまえて、他人にとってはどうでもよい己が悲しみをのべつ幕なし捲し立てた。

「理解出来ん、僕程の天才がこの様な憂き目にあうとは。所詮この世なんて。ああ、くそつたれが、畜生め。女なんて死にくたばれ。」

と、この様な罵詈雑言を何も悪くない友人に浴びせかけ、迷惑千万であった。

が、懲りもせず、ゆえに何も学ぶ事もせず、暫くすると立ち直り、また疾走し、こけた。蘭から逃げ出して以来、今に至るまで、ずっとその繰り返しだった。ずっと暗闇の中にいて、これ以上下もないものだから、絶望すれど死ぬ事もなく、斜に構える事で何とか自分の中で体裁を保ち、斜に構えすぎてもはや寝そべり、開き直っていた。

つまり、僕は気付けば鼻つまみ者に成り下がっていた。コンプレックスを自信とすり替えて、変な選民意識に毒され、自意識過剰極まりなかった。生まれたときは人並みに両親からその誕生を祝福されたのであろう赤子は、二十数年転げ落ち続け、今はもう平地にいる、奈落の底さ。

まあいい、分かり切った事を並べ立てても、卑下にすらならん。そんな僕でも今まで生きてこれたのは、これは一重に寛大な他人様のお陰だと思っている。他人様達はこんな鼻つまみをシカトする事もなく、笑い物という嘘をつき通してくれた。そうやって俺の悪意を飼い慣らしてくれた。感謝している。ありがとう。

僕はこれからも、命ある限り、疾走し続けるだろう。迷惑をまき散らし続けるだろう。そんな気がしている。だって、「基準」が振り切れたままだから。黙殺するか、抹殺するか、それともこのまま笑い物としてやり過ごし続けるか、殺生与奪の権限は全てあんた方が握ってるんだ。任せるよ。

ぼう、としていたら、また過去の屈辱を思い出してしまい、悪意が込み上げてきた。僕が座っている座席の目の前でも隣でも、そこかしこで、他人が騒ぎ立てているからだ。正論を正論のまま鵜呑みにし、決められた通りに酒を飲み、しかもたくさん飲み、卒業を祝い、楽しみ、ここぞとばかりに仲良しごっこを繰り広げている同世代の他人様共が騒ぎ立てるからだ。こいつらが真っ当に社会に出て、あるいはエスカレータの大学院に進学し、社会に出て、真っ当な社会の一員として活躍していくと思うと、この糞つたれな世の中をより盤石なものにしていくのだと思うと、吐き気がした。真っ当な他人さまは、真っ当を「基準」にして、俺を裁く、これからも。そして俺もこの席に参加しているという事は大学を卒業するという事であり、大学院に進学する事になってはいるみたいだが、いずれは他人様共にひっ付いて一人前面してその真っ当な社会に参画しないとは言い切れず、無性に負けた気がするのであった。

就職活動という真っ当宣言（俺からすれば敗北宣言）を早々に諦めた俺は、世間一般で言うモラトリアムというやつを引きのぼし、大学院に進学することにしたのだが、それも時間の問題だ。いよいよ年貢の納め時が迫ってきているという気がする。あぶく銭で身も心も売り渡さなきゃならん。

まあいい、もういい、どうでもいい。俺も男だ。父母も安心させなきゃならんし、嘘でも身の程を知ったふりをしなけりゃならんのかもしらん。「はい、そうです。」と言って、卑屈な笑い方をすればいいんだろう。ああ、くだらねえ。

考えなけりゃ、呑みこまれちゃう。でも考えてたら、裁かれる。俺は出る杭として打たれ続けてきた気がするが、それ

もこれも、あの始まりのお陰だったんだろうと思う。蘭が俺に振り切れた「基準」をくれた時から、こうなる事は決まっていたんだろうと思う。蘭は何も語らず、その術を持たなかったのかもしれないけれど、ただひたすらに俺を求めた。多分、「俺」ではなく「誰か」、誰かの中に救いを求めたんだろうと思う。でも俺は君に「救い」を差し出せなかったし、それが何なのかすら分からずに、逃げ出した。

ずっと、ひっ掛っているんだ。だからあれ以来、僕はずっと君の求めていた「救い」の答えを解き明かしたくて、本ばかり読んでいたよ。映画も見だし、AVなんかもよく見た。僕はそれこそ真剣に、血眼になってAVを見たよ、画面の中に答えはあるんじゃないかって思って。他の男が自己処理する為に見るのなんかとは訳が違ったんだよ。数え切れないほど見て、中にはとても素晴らしい作品もあって、それを撮っている監督が、僕と同じようなものを捜しているんじゃないか、なんて思ったりもした。本なんかは特に露骨で、グッとくるものは大体、僕と同じ方を向いて走っている人が書いていた、と思った。勘違いかもしれないけどね。

表現というものの中間はたくさんいて、ずいぶんと勇気づけられたけれど、みんな道の途中で、肝心の君が捜していた答えはなかなか見つからないよ、蘭。でも、待っててくれ、見ていてくれ。俺は、捜し続けるから。途中、他人様の社会と契約を結んだり、他にも色々あるかもしれないけれど、きっと見つけ出してあげるから、待っていてくれ。もう逃げたりしないから。なんてたって、君は僕が出会った最初の女の子だからね。君が、道を指し示してくれたんだから。

6、「現状、蘭の場合」

さっきから身体が前後に揺れている。身体に重圧がかかって呼吸がし辛い。スプリングがギシギシと軋み、私はベッドに沈み込んで宙を仰ぎ見ている。でも、視界は遮られ、部屋の天井は見えない。見えるのは男の顎の下、汗が滴り落ちて、眼の中に入った。沁みて、蘭は眼をつぶった。真っ暗な中、覆い被さって蘭を揺らす男の重みと、私の中に入り入ったりしている性器の間隔、それだけが感じられる。

悪くない、と蘭は思った。私はこれが好きなんだ、ずっと前から、ずっと。男の性器が私の中に入ってきて、出ていく。そしてまた入ってきて、出ていく。飽きる事もなく繰り返されるこの上下運動が、私は好きなんだ。

男の振動が段々と速くなっていく。こいつ、そろそろイクな。まだ入れてから五分と経ってないじゃないか、使えない。また次のを捜さなくちゃいけない。今日はもう遅いから、捕まえられないかもしれない。明日に備えて今日はもう終わりにしておこうか。

ぼんやりとそんな事を考えているうちに、男は果てて、動かなくなった。その後暫く、男は蘭の上で動かず呆けているが、おもむろにベッドの脇にある時計を見やり、あわてて起き上がった。

「やべ、終電無くなっちゃう。」

そういうと、そそくさと着替え、背広のポケットから財布を取り出した。古びてよれた皮の財布の中には、お札はほんの数枚しか入っておらず、男はその中から一万円札を一枚と五千円札を一枚、取り出して蘭に差し出した。

「はい、お金ここに置いとくね。じゃ、俺先に帰るから。」

そう言って男はそそくさと部屋を出ていった。

ホテルから出ると、終電が終わったにも関わらず道には客を捕まえ損ねた女達何人か立っていた。それらの女達は韓国人や中国人の歳の入った女達だった。彼女達は一人ホテルから出てきた蘭を恨めしげに睨んだ。蘭はそんな女達を別段気にするでもなく、ホテル街を後にした。それは、蘭にとって女は興味の対象外であったからであるし、もし仮にそうではなかったとしても、結果は変わらず、気にすべき相手ではなかった。蘭がいつも立っているこのホテル通りは、ほとんど最低の値段で男に身体を売る娼婦たちが立っている通りであったし、そこですらろくに客も捕まえられない様な女達に嫉妬交じりの眼で睨まれようと、これっぽちの優越感の足しにもなりはしないのだった。

今年で22歳になる蘭の様な若い女が、この通りを定位置にして身体を売っているという事はほとんど考えられない事だった。しかも、蘭は特に見てくれに問題がある訳でもない、自分ではそう思っていたし、事実誰が見てもそうであった。蘭程度の若い女であれば、この通りからほど近い歌舞伎町の店でも十分に稼げるはずである。そんな女がこの通りに立っていたら嫌でも目立つ、先程の女たちが蘭の事を睨みつけたのも無理のない話である。

では一体なぜ、蘭はこの通りに立っているのか。答えは単純である。ここに立っているのが男を見つけるのに一番楽な方法だったからだ。蘭は金に困って身体を売っているのではなかった。ただ単に男とやりたいだけなのである。だから、別に身体を売る必要さえもないのではあるが、そうした方が簡単に男と寝る事が出来るというだけの話なのだ。蘭が身体を売るようになったのは高校を卒業してからの事で、それまでは街でナンパ待ちをしたり、声を友達に男を紹介してもらったりしていた。ただ、そうした場合には出会った男と寝るまでに最低でも数時間はかかる訳で、蘭にはそうした何やかやのステップは煩わしいだけだった。出会い系やテレクラを使っていた事もあったが、それよりも今しているように娼婦たちと一緒に立っていた方が楽であり時間もかからない事に気が付き、それ以来毎日、日が暮れるとこの通りに立つことにしているのである。また、店で働いていた事もあったが、そういった店では決まりやら同僚との人間関係が煩わしく、すぐに辞めてしまった。

一つ年上の従妹の真希ちゃんは蘭が身体を売っている事を良く思っていない。思うだけじゃなくて会うたびに一々口うるさく文句を付けてくる。「危ないからやめた方がいい」とか、「女がそこまで落ちたらお終いだ」とか。蘭は「ふん、自分だってキャバやって、よく客と寝てる癖に」と思いながらも、真希のだからだと長ったらしいその文句を黙って聞くことにしている。いつも下を向いて、空になった飲み物のグラスに残っている氷をかき混ぜたりしながら、聞き流している。そうしていると真希ちゃんは蘭が落ち込んだ、もしくは反省した、と思いきや満足し、話が早く終わるのである。

この日もそうだった。立ちんぼを終えて帰る途中に真希ちゃんから、電話があった。今日は真希ちゃんは働いている横浜のキャバを休んで新宿に来ているから会おうという内容だった。すぐに落ち合せて、真希ちゃんが休みの日だからお酒を飲みたくないと言うので深夜営業のファミレスでドリンクバーを注文して、そこから今まで延々とお説教されていたのだ。

「もう、蘭もしっかりしなさいよ。」

真希ちゃんはそう言ってジュースをおかわりしに席を立った。この「しっかりしなさいよ」が真希ちゃんの説教の終わりの合図なので、蘭はほっとした。

真希ちゃんとは昔からいつも一緒にいて、蘭にとっては色々世話焼いてくれるお姉ちゃんのような存在だった。真希ちゃんの両親は真希ちゃんが中学生の時に離婚して、それから真希ちゃんはお母さんと一緒に暮らしていたんだけど、真希ちゃんはお母さんと仲が悪くて、しょっちゅう家出しては蘭の家に転がり込んだりしていた。その後、真希ちゃんは高校を一年足らずで中退して、それからはずっとお水の仕事をしながら一人で暮らしている。

蘭の両親は離婚こそしなかったけど、決して夫婦仲が良かった訳でもなくて、二人とも自分の部屋に閉じこもって、家の中では殆ど会話もなかった。両親揃って蘭の事にも無関心だった。だから、真希ちゃんが一人暮らしを始めてからは殆ど家には帰らずに真希ちゃんの家に入り浸っていたな。だから、蘭が高校を出てから（就職が決まった訳でもないのに）一人暮らしをしてみると言っても両親は何も言わなかったし、蘭が今売りをして生計を立てている事も知らない。

二人ともこんなだったから、ずっと一緒にいたんだと思う。真希ちゃんの説教にはほとほとうんざりしていたし、売りを辞める気なんてさらさら無かったけれど、それでも蘭は真希ちゃんの事が好きだった。小さい頃からずっと一緒だったし、私の事を本当に心配してくれるのは真希ちゃんしかいない。蘭はそう思っていたし、真希ちゃんの事を信頼していた。

真希ちゃんがアイ스티ーがいっぱいに入ったグラスを持って席に帰ってきた。真希ちゃんは席に着くなり今働いているキャバの同僚や、客の悪口を猛烈な勢いで愚痴りはじめた。蘭はそれにうんうんと頷きながら「真希ちゃんが今持ってきたアイ스티ーを飲み終わったら帰らなくちゃ。」とぼんやりと考えていた。

今日は帰ったらすぐに寝よう。明日に備えなくっちゃ。だって、明日は撮影があるんだもん、しっかり寝て体力を蓄えとかなくっちゃ。明日は楽しみにしていたAVの撮影日なのだ。

蘭がAVの仕事を始めたのは一年ほど前の事だった。それから月に2、3本のペースで撮影をしている。蘭はいわゆる企画もの系のAVに出演する女優だったから、一本の撮影では10万程度の金が入るだけで、それはメジャーレーベルに所属するアイドル女優と較べて割のいい仕事とは言えなかったが、蘭は企画系のAVの仕事の方が好きだった。せっかくセックスのプロとやれるのに、普通のセックスと同じようなことしかしないなんてもったいない、蘭はそう思っていたのだ。

企画系のAVは女優にとってはハードな内容のものが多かったが、自分の欲求の充足という蘭の純粋な目的にとってはそれは好都合であった。マンコ、アナル、口の三つの穴に同時に男性器を挿入されたり、棍棒の様な性器を持つ黒人に犯されたり、何十人もの男達に輪姦されたり、緊縛されて電気ドリルの先にパイプをとりつけた玩具でイカされまくったり、例を挙げればきりがないが、そんな非日常の極致ともいべき撮影の数々は蘭にとっては快樂そのものであり、毎回毎回の撮影が楽しくて仕方がなかった。

普通の企画系の女優達は（蘭とは違い）不本意ながらそこに堕ちてきた者も少なくなく、撮影の度に泣きながら帰る女などもいるのだが、蘭の場合は撮影が終わると毒が落ちたようなスッキリとした表情で、でも少し名残惜しいというか物足りないという様な様子でいるものだから、監督はじめ現場のスタッフからも「蘭ちゃんは元気でやりやすい」という事で好かれていた。企画系の女優は一本出たらお終いという子もいるくらい、普通のAVと較べても特に女優の寿命が短い。1年以上続けている蘭などは珍しい部類に属するのだが、その真面目な勤務態度からか仕事が途絶える事もなく、蘭の方でも続けられる限り続ける気でいた。

ズズツという音を立てて、真希ちゃんがアイ스티ーを飲みほしたので、蘭は声をかけた。

「あたし明日早いから、今日はそろそろ帰る。」

「え、何かあるの？」

「うん、ちょっと。」

蘭がそう濁したのをみて、真希ちゃんが眉をしかめる。

「もしかして、あんたまだAVの仕事やってんの？やめときなって言ったじゃん。顔ばれとかしたら後々面倒だし、きっと後悔するって。」

このままでは、またいつもの調子で真希ちゃんの詰りが始まってしまう。

「でも・・・、素人ものだから顔には目線入ってるし・・・、大丈夫だよ。」

蘭がモジモジしてそう答えると、

「いや、そういう問題じゃなくってさあ。あんたには恥じらいとかプライドとか、そういったものはない訳？」

うんぬんうんぬん。真希ちゃんはぶつぶつ言っている。

「うん、じゃあ、またね。」

蘭は無理やりに真希ちゃんの説教を遮って、席をたった。

「あ、蘭、ちょっと待ちなさいよ！話まだ終わってないんだからあ！」

真希ちゃんはそう言って、まだぶつぶつ言いながらも蘭を追って席をたった。

真希ちゃんの言う様に、わたしには恥もプライドもない、と蘭は思う。蘭にとってそんなものは余計でしかなく、何の必要もない。快樂、それがすべてだ。男に求められる事、蘭にはそれがすべてだ。お金すら要らない。快樂の結実、それが蘭の人生なのだ。ただそれゆえに、自分にとっての人生が、先がそう長くはない事も蘭は知っていた。男から必要とされなくなる時、蘭の人生は終わるのだ。蘭はその事をはっきりと認識していた。けれども、他の女たちがよくそうするようにそれが理由で焦ったり、その焦りゆえに心を醜くしてしまうという事はなかった。蘭はいずれ終わるという自分の運命をそのままに受け入れていたのだ。だから、真希ちゃんが会うたびに愚痴ばかり言って、恥とかプライドとかなんとももったいつけているのは、少しでも自分を高く男達に売りつけようとして焦り、ヒステリーになっているようにしか見えなかった。そして蘭はそんな真希ちゃんが可哀想に思えた。

蘭は死を恐れる事はなかったのだ。一方で、男達は皆一様に死を恐れていた。脅えきっていて、死から逃れようとし、駆り立てられるようにして女を求めていた。快樂に溺れようとしていた。その点においては、蘭と男達は決定的に違っていた。そして蘭はその違いが好きだった。男達の焦げ付く様な怖れを憐れみ、慈しんだ。男を受け入れ、男を求めた。男というものを心底から愛していた。

母に甘えるように、すがるように蘭を求める男、責め立て、征服しようとして蘭を求める男。男達の行為はそのどちらかの形式をとることが多かったが、それは表面上の表れ方の違いでしかなく、求めるものは同じだった。男達は生命の泉で渴きを潤したいと、そう思っていたのだ。蘭は死を恐れぬがゆえに、男達に惜しみなくそれを与えた。男達にとって、蘭は寛容さそのものだったのだ。

7、「存在、記憶、漸近」

シャッカシャッカ、シャッカシャッカ。と実際にそんな音がしているのかは分からないが、文字にすればそんな風になるのであろう擬態音をたてながら、僕はベットに寝そべり、下半身を剥き出しにして、40インチの液晶画面を見入っていた。いつもの如く。憶え始めた日から約10年、一日も欠かすことなく続けてきたこの営みを、今日もまた粛々ととり行っているのであった。その「セズリ」という行為をしている自分の姿というのを見た事はないが、10年もの間毎日毎日飽きることなく続けてきたのであるから、職人芸というか、ある種の様式美の様な様相を呈しているのではないかと想像するに難しくはない。とうの昔にその代替的性行為としての目的は忘れ去られ、「癖だからする」という様に、もはや儀式と化しているのである。

さて、そんな厳かな儀式の本日の「肴」は、「リアルガチ！！素人ナンパ全集6」というタイトルである。無感情に竿を扱きながらも、「果たして、世の中には何本のこれと大差ない様なDVDが、絶対にガチでも素人でもではないことが分かり切ってしまう「素人もの」のDVDが出回っているんだろう。そしてそれらを全部ひっくめると、一体何人の女の情事が記録、保管されているんだろう。その女達一人一人に父と母がいるということは、実はとんでもない事なんじゃあなかろうか」等と、僕が心配しても致し方の無いことをぼんやりと、考えるともなしに考え、それでも僕の左手は休むことなく竿を扱き続け、予定通り射精へと導かんとしていた。

「あっ！！」

突如、竿を扱う左手の上下運動は止まり、僕は目を見張った。40インチの液晶画面に映っている「ニセ素人女」、その有象無象の中の一人に、僕の眼は釘づけにされてしまったのである。

最近の「素人もの」は、もはや制作側が開き直っているのか、顔にモザイク処理を施していない事がよくある。僕が本日の肴として使用していた「リアルガチ！！素人ナンパ全集6」も、女の顔がそのまま晒されていた。やらせを隠す気など更々無いのだろう。それとも、顔出しをOKしてしまう、頭のユル過ぎる素人女が巷には溢れ返っているというのだろうか。それはそれで嘆かわしい。やはり顔出しNGくらいは最後の慎みとして持っていてほしいものである。

とまあそれはさておき、問題なのは今画面に映し出されている、男優と組んずほぐれつの狂態を演じているその女である。見覚えがあるのである。それどころか・・・、間違いない。蘭である。嘗て僕と組んずほぐれつの狂態を、カラオケで、映画館で、俺の部屋で、一緒に演じた蘭が、画面の向こうで悦び喘いでいる。

何が起きているのか、訳が分からない。グルン、グルン。世界が廻り始める。扱いてもいないのにいつの間にか射精し、精子まみれになってしまった布団をティッシュで拭いながら、僕は茫然とし、すぐそこにいる蘭の悦楽の表情に魅せられていた。

8、「発露」

株式会社 ときめき桃色破廉恥倶楽部 ファンレター受付係様

先日、貴社の映像作品「リアルガチ！！素人ナンパ全集6」を拝見させて頂き、その中に出演されていた素人娘、のきあ（21）さんに私はすっかりメロメロにされてしまいました。つきましては、「存在と記憶の距離感」と題し少々長めのファンレターをしたため、同封させていただきました。

作品上の設定ではのきあさんは素人娘であるという事でしたが、少し調べたところ企画女優さんとして貴社の他の作品にも出演されているようでしたので、同封したファンレターをのきあさんにお届けいただければ幸いです。どうぞよろしく願いいたします。今後とも、のきあさん、およびにときめき桃色破廉恥クラブさんを陰ながら応援させて頂きたいと思っております。失礼いたします。

しがない素人童貞の一人 オパーリン

完

読了リスト感想文

このコーナーでは僕がその月に読んだ本や、見た映画等の簡単な感想を書いています。

- 本 -

・東浩紀

『郵便的不安たち^β 東浩紀アーカイブス1』

詳しくは「繋げる男」（P24）に書いた。一言だけ感想を言うならば「スゲー」に尽きる。こんなにも頭のいい人が今の時代に、まだ生きている、という事に感服する。

・根本敬

『因果鉄道の旅』

特殊漫画家、根本敬。遅ればせながら彼と出会う事ができた。問答無用で「オパーリンお気に入り作家セレクション」の仲間入りである。比類なき破壊力。作中、（おもしろい）動物愛護団体のボランティアのおっちゃん言葉「無駄だよ。でも、やるんだよ！！」みたいなくだりがあって、なんか、凝縮された一言だったな。無駄になっちゃってるのは完全におっちゃん達の世話の段取りの悪さに起因している所もグッド。言葉の力を感じたね。

日本有数の「公共の場で読むのが危険な本」でもあるね。僕は勿論、つくばエクスプレスの中で読み爆笑→発狂してたけどね。

・根本敬

『夜間中学』

ライトエッセイ。本当にこんな学校があれば、義務教育の過程に組み込むべき。作家の身辺を窺い知るというエッセイの醍醐味、という点からいってもきっちり押さえられている。

蛭子能収（漫画家、ウィルコムCMに出ているダメ人間の星）ウォッチャーとしての彼の仕事は、蛭子さんを知るための数少ない資料としても貴重。

・斎藤智裕

『KAGEROU』

記事執筆において必要性が生じて読んだ。その成果は「お前、悩んでんだろ」（P28）に結実している、といいんだけどな。記事でも書いたけど、内容は普通に楽しめたよ。赤○次朗とかよりは全然面白い。あの賞がいけなかったんだよな。ただ、作者と作品は独立して、別々に考えられるべきではある。

・井上理津子

『最後の色街 飛田』

「飛田」という街については、僕の「気になっているもの」の一つとして、今後も関連文献を発見したら読んで勉強し、いつかは（去年の夏に足を運んだ経験をふまえて）文章にしなきゃな、と思っている。ちなみに、現時点での僕の興味の方向としては、やはり釜ヶ崎との地理的な近さ（山谷と吉原のそれにも対応関係を見出さずにはられない）や、その他諸々の関係性、みたいな所が気になっている。

本書の感想としては、やはり12年もの期間を費やして取材をしていただけたことはあり、書かれている事実や知識、住人の声は資料として大変貴重。しかし、この作者の見解や語り口（つまり、作者の思想の背景にあると察せられるもの）には違和感が付きまとう。端的に言うと「嫌いなタイプ」なのである。どういう風に嫌いなのか、説明するのが難しい。多分本能的に嫌いなのだが、あえて言葉にすれば、作者が「女代表」みたいに粹がっている感じがするのだ。「女を買う男は最低」とは言っていないのだが、そういう嫌悪感ヒシヒシと伝わってくる。で、作者が飛田に執着する

のも、そういった「女権意識」の様なものが根深い所にあるからなのでは、と感じるのである。

つまり、「飛田に通う男の視点」がこの本には足りない（インタビューしてたから無いとは言わないけど）んだと思う。売る女と買う男がいて初めて売春は成立するのだから、その片方だけから物を見ているだけでは、十分ではないのだ。

ただまあ、幸いにも（作者のそういった「視点」のおかげもあってか）結構売れているみたいで、先日も秋葉のヨドバシ内の本屋でも平積みされていた。多くの人が飛田の事を知るきっかけになれば、と思う。

- 漫画 -

・根本敬

『亀の頭のスープ』

特殊漫画家としての彼の本業の凄まじさを垣間見た。絵は全て市販のマジックで書かれている（様に見えるタッチ）。巻頭カラーも色マジックで塗られているだけ（に見える）。しかも、塗り方は非常に雑。台詞も活字ではなく、手書き（字も解読が困難な程に下手くそ）。途中で書くのが面倒になったのか、コマ割が無くなり、紙に絵を描いているだけの状態になってしまう。

内容に関しても、下品とかそういう既存の言葉では言い表わせない程の「ひどさ」である。差別用語も出まくりで、混沌とし過ぎてははや差別ではない。

「天才」の一言に尽きる。ぜひ一読する事を勧める。

- 映画 -

・『FINDING FORRESTER（邦題 小説家を見つけたら）』

ゴミ映画。処女作でピューリツァ賞を受賞し、しかしその一作だけで文壇から姿を消した天才老作家が、物凄い文才を持つ天才黒人少年と出会い、小説の書き方を指導する、みたいな話である。

で、どこが糞だったかという点、脚本家の態度である。二人の天才作家（片方は作家候補か）が登場する話なのに、映画の中で一切彼らの書いた文章が登場しない。全部「雰囲気」で済ませている。逃げ過ぎ。

いや、気持ちは分かる。脚本家は脚本家をやっている位なんだから、文章の天才ではない。だから、天才の文章なんて書けない、当然である。書けたら天才作家になっているはずである。

でも、だよ。仮にも文章を生業にする者の端くれなんだったらさ、挑戦くらいはして欲しかった。天才の文章が書けないこと位はみんな分かっているんだからさ、そこは開き直って、堂々と凡人の文章を書き「これが天才の文章じゃい、ボケがあ」と言って欲しかった。

以上。

・『THE OUTSIDER 2011 Vol. 3』

相も変わらず、不良たちの熱い戦いが繰り広げられていた。このシリーズの良い所は、演出側が必死で「あぶれ者達の悲愴」を醸し出そうとしているのだけれど、実際の「アウトサイダー」達の「はしゃぎっぷり」が余りにも低俗過ぎて、彼らのゴミっぷりだけが際立ってしまうというアンバランスさである。ギャップである。登場する不良たちは皆、筋金入りの「ダメ人間」であり、彼らが今いる現状に陥ってしまったのは社会のせいでも何でもなく、完全に自己責任であることは明白であり、そのゴミ加減が非常にチャームングである。

その結果として、作品全体からは非常に鋭い「ナンセンス」感が醸し出されており、一度観てしまうと止めることは非常に困難、半端ない「中毒性である」。興味を持たれた方は相応の覚悟の上でご覧下さい。

・『ガープの世界』

ジョン・アーヴィング原作。主人公のガープは、なんか少し『フォレストガンプ』の主人公を彷彿とさせるキャラクター。

悪意の塊のようなお話。特に女権運動家へのディスりはひどく、「この作家、絶対に女に関してのトラウマを抱えているな」と思わずにはいられない。嫁のヴィッチっぷりもヤバい。主人公が不憫で、観ていて胸が痛くなる。指折りの女性不信養成映画である。

で、気に入ったので原作を読もうと思ったのだが、アービング売ってない！しっかりしろ出版社！しっかりしろ流通！

・『新世紀エヴァンゲリオン アニメ版』

今更かよ！という声がヒシヒシと聞こえてくるが、面白かったなあ。シンジに共感。それにしても、伏線の回収は完全に放棄されていたね。アメリカのドラマとかもそうだけれど、段々と「伏線は放置する為にある」と思えるようになってきた。

それに、「読者、観客は置き去りにするもの」だとも思えてきた。要するに、面白ければ勝ち、みたいな所はあるよね。あと、絶対に理解していない癖に「あれのすごい所はね、うんぬん」と、「俺凄いだろ」と言いたいのが為に難しいものを評価する奴っているよね。

エヴァは「最後は全く理解出来なかったし、なんかモヤモヤしたまま終わったけど、結果として面白かった」んだけど、『2001年宇宙の旅』とかは最初から最後まで訳が分からず、結果として一つも面白いと感じなかったもんな。あれを「これを理解劇ない奴は映画語るな」と言わんばかりに偉そうに評価している奴って、意味分らんわ。解説してくれ。ついでに「人類補完計画」についても教えてくれ。どんな計画だったのか分からないまま終わってしまったぞ。

・『劇場版 新世紀エヴァンゲリオン Air／まごころを君に』

この劇場版は、アニメ本篇のエンディングに文句を垂れる人が多かったためか、別バージョンのエンディングとなっている。そもそも、他人の創作物の話の筋に文句を垂れる人の神経が、僕には到底理解できない。

読者や視聴者には、受け手として面白い、つまらない、の感想を抱く自由がある。それだけで十分じゃないか。作り手に対して「ああしろ、こうしろ」というのは筋違いだと思う。

作り手には自由に創る権利があって、つまらなきゃ売れない、それだけ。嫌なら観なきゃいい。

あれ、フジテレビの反韓流デモと被ってきたなあ。あれについても思う所は色々あるから、それはまた別の機会に書こう。

映画の感想としては、「アスカってこんなに重要なキャラだったんだあ」と意外だった。

・『ALWAYS 三丁目の夕日』

「泣かせたる！」っていうスケベ心全開の映画だった。ここまでやればアップレ、という意見もあろうが、僕は必死に諍い、「死んでも泣かぬえ」と自分を鼓舞して戦った。しかし、徐々に奴の策中に陥り、涙腺が緩み、視界がぼやけ出し……。でも結局泣かなかったもんね！！いやー、匠だな。

- A V -

・『バクシーシ山下 素人ハメ撮り大全集』

久しぶりにアマゾン覗いたら安価で出回っていたので狂喜して購入。ふと思ったのだが、俺と同じようにバクシーシ山下作品を切望している人って、今日本で何人くらいいるんだろう。100人いるのかな。いないだろうな。という訳で、バクシーシ山下を広く世に知らしめる事が僕に課せられた責務であると勝手に自認し、広報担当を気取っている。彼の作品が広く知られ、再評価されれば、再販されて、僕が見ることが容易になると考えるからである。

内容について、普通のハメ撮り集。しかし、随所に「バクシーシらしさ」が顔を出す。特に感じたのは、覗いているとハメられている女の子の（負の）感情がよく伝わってくるのである。女の子「あー、いやだなあ」みたいな嫌悪感が画面越しによく分かるのである。

どうしたらああいう風に取りれるんだろうと思う。撮り方、場の作り方、などいろいろあるのだろうけど、一番は彼がそういう女の子の感情を敏感に捉え、意識的にその感情をカメラの枠内に折り込んでいるんだろうと思う。

A Vにおいて女優はあくまで性欲の対象であり、人間というよりは消費物として被写されることが多い。その為、A Vの画の中に感情が入り込むことは少なく、その結果として当然、A Vというものはある種の「平板さ」を伴う事になる。A Vって1本通して観る事ってあんまりないでしょ。絡みまで早送りしたり、抜き終わったら続きは観なかったり、あくまで実用的に作られていることが多い。

ところが、バクシーシ山下の作品には、その現場にある「禍」みたいなものまでもが画面から伝わってきちゃうから、そ

っちが気になる。彼の作品がよく「ぬけない」と言われる原因もそういうところにあるんだと思う。

ああいった撮り方は彼にしかできないし、それが彼の才能何だと思う。彼の作品が「作品」である所以もそこら辺にあるんだろう。

・『バクシーシ山下の未公開劇ヤバ映像4時間』

彼の著書『セックス障害者たち』で紹介されていた、彼の作品に度々登場する名物男優（一流の変態）たち、を初めて拝むことができた。特に、ポンプ宇野（自在にゲロをすることができる男）の映像が入手できたことに感激。他にもアナル山田医院長、尿木監督、風俗漫画家の平口広美（この人がメインの山下作品もあり、それは一つ所持している）など、神の様な変態が多数登場した。

特に尿木監督は「俺はいくらでも尿を飲める」的なキャラなのに、図に乗って飲みまくってたら体調が悪くなってゲロしまくってて爆笑した。

あとは、お笑い芸人、東京ダイナマイトのハチミツ二郎が出演しており、「この人、AVもやってたんだ」と驚いた。

バクシーシ山下愛好家の僕としては、非常に価値のある作品を入手することができ、マニアとしての喜びを噛みしめることのできた一日であった。

執筆者略歴

この雑誌の発行人である僕（オパーリン）以外の執筆者が記事を投稿してくれることになったので、このコーナーを設けた。

・オパーリン

1988年生（23歳）。大学二年生の時、女にフられてばかりの学生生活に嫌気がさし、自分に都合のいいことしか起きない国を作りたいと思う様になり「王国構想」を計画し、勝手に「オパーリン王国」を創り独立。本誌『月刊オパーリン王国』も「王国構想」の一環である。

また、アマチュア小説家としても活動しており、過去3度「筑波学生文芸賞」に作品を投稿するも全て落選。「世の中が俺に追い付いていない」と負け惜しむ日々を送っている。過去の作品は電子書籍サイト「パブー」で電子化されており、無料で読むことが出来る。

・東町健太

たぶん1987年生まれ（24歳）。僕（以降、オパ）が4月生まれであるのに対して、彼は3月生まれなので学年は2つ上である。オパが記事に添えてプロフィールを書いてくれと頼んだところ「お前が適当に書いといてくれ」と断られたので、オパが知りうる限りの事を書いていきます。

大学（文学部？）を中退後、ブラックな印刷会社で働くなど、身体を張った「文学」を行っている。オパとはかれこれ3、4年の付き合いになるだろうか。オパに文学と風俗のイロハを教える。オパが東京に帰省する度に会い、一緒に東京の町を散策する。現在は週刊漫画を印刷している工場で単調かつ過酷な労働を強いられている。本人いわく「脳が溶ける」そうだ。最近では昇進し、色々やる様になってきたそうです。

・多良鼓

1988年生まれ。熊本出身。アンパンマンになりたいと思って学を積んでいたら、大学一年で「たらこ」と名付けられた。たらこスパはバター入りが好き。

（↑）これでは読者は何のこっちゃか分かったもんじゃない、と思いましたので、オパーリンが少し補足します。多良鼓はアニメが好きだと言うので、記事を書いてもらう事にしました。僕の同級生です。今回は以外にも（？）宗教についての記事を書いてくれた。

・弦楽器イルカ

よく知らない人。気づいたら記事が掲載されていた。とりあえず隅っこに寄せて、少し泳がせてみることにする。

編集後記

いやはや、大変であった。今月号の執筆、編集は創刊以来最悪の押し具合であった。書けば書く程に新しいネタが思い浮かんでしまい、先にそっちを書いてしまうもんだから、書いても書いても書かなきゃならん記事（連載とか、書評とか、毎号書いているものね）に辿り着けない。しかし、執筆者も増えてきたという責任があり、締切を延ばしては彼らに示しがつかん、つまるところ恰好悪い。締切とプライドとの板挟みに会いながらも、何とかこの後書きまで漕ぎ付けた次第である。

僕のそんな余計な創作意欲（そして、しっかりと締切を守ってくれる3人の律儀な執筆者）の生んだ賜物である月刊オパーリン王国2012年1月号、いかがであっただろうか。まあ、読者のみなさんがどう感じるかは考慮に入れないで作っているのだがな。ちなみに多良鼓氏は「読者の感想大募集」だそうなので、みなさん感想をよろしく願いいたしますね。宛先は巻末にあるメールアドレスまで、パブーにコメントくれてもいいですよ。

で、先月号以降の読者からの反応を紹介しようか。そのうち、読者からの反応が増えてくれば（そんなことは無さそうだけんどもね）、「声」欄作るのもいいなあ。年明けに年賀状をくれた勤勉な読者がいる。しっかりと手書きで応援メッセージも書かれていた。嬉しい限りである。大変励みになる。ありがとう！

来月は今月号の様な分厚さを実現することは不可能であろう。それでも、継続は力なり、必ず皆さんのもとに月オパを届ける事をここに誓う。

それでは皆さん、また来月お会いしましょう。ごきげんよう！

（2012年1月20日）

「月刊 オパーリン王国」では「はばからない」をコンセプトに、「何か、何でもいいから、とにかく主張したいだ」という方に対して紙面を提供したいと考えています。少しでも思い当たる節のある方は是非、記事を投稿してください。送り先は、

Kuukiyomimasenn0409@gmail.com

まで。

本文、形式、筆名、簡単、筆者略歴を添えて送りください。お待ちしております。（国王 オパーリン）

—2012年1月20日発行—

編集・発行人 オパーリン

パブ版あとがき

遅れてしまった。現時点での僕という人間の矜持というか、存在意義といった様なものは一重にこの雑誌に懸かっていると言っている。その僕の大切なものの存続を脅かす日々のよしなしごと。由無事、つまりは生活であったり建前上の人生であったりするもの。僕にとってはとてつもない脅威である。ストレスフルである。でもまあ、言っても仕方があるまい。それは皆同じであろうから。とにかく、遅れてしまったにせよ、出せてよかった。来月号、2012年2月号の予定を書いていこう。まず、参加、体験ルポを書くつもり。テーマは、若手僧侶による説法ナイト、渋谷道玄坂劇場（ストリップ）、1・19三鷹事件の再審開始を求める集い（森達也氏講演）、死刑映画週間『BOX 袴田事件 命とは』（森達也氏トークショー）、芝浦と場見学。書く方が追いつかないかもしれないが、行くには行った（もしくは確実に行く）事案なので、間に合わない分は3月号に回すかも。あとは、論評を一本、幻冬舎アウトロー文庫研究。連載を開始した小説『生き恥を、晒して足搔く、私かな』については、書きためた分があるので掲載できると思うけれど、出来れば一章分まとめて掲載したい。僕以外の執筆陣に関しては現在までのところ未定（話は進めている）。他には、記事を投稿してくれた人がいるので、「作文」というコーナーを作って掲載する予定。執筆者の筆名、略歴をまだ決定していないのでそこは月末までに詰めないとな。以上、2月号予告でした。いつも通り20日に紙版を発行できるかどうかは分からないけれども、何としても2月中には発行して見せます。お楽しみに。最後に、読者からの反応を紹介。今月もポストカードを送ってくれた読者の方がいました（仮称Kさん）。眠っているフクロウのポストカード。「お前、悩んでんだろ？」で笑ってくれたそうです。Kさん、いつもありがとう！隔月にはなりません。では、また来月お会いしましょう。皆さまお元気で。

2012年2月14日

月刊オパーリン王国 2012年1月号

<http://p.booklog.jp/book/44566>

著者：オパーリン

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/opaarinn/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/44566>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/44566>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.